



日本コミュニケーション学会
第51回年次大会

危機とコミュニケーション
Crisis and Communication

2022年6月4日(土)～6月5日(日)

June 4-5, 2022

[大会参加者へのご案内]

1. 本年次大会へは大会参加フォーム (<https://peatix.com/event/3246384/view>) より、オンラインでお申込みください。大会参加費は2,000円(返金不可)です。参加申し込みは6月5日(日)まで受け付けておりますが、できる限り早くお申し込みください。直前のお申し込みの場合は、希望するセッションの開始までにZoomミーティングのURLを受領できない可能性があります。年次大会のパネル、研究発表への参加は参加費を支払った方に限定されます。但し、6月4日(土)の基調講演とシンポジウムは一般公開であり、事前参加申し込みをした場合にはどなたでもご参加頂けます。
2. 本年次大会は、すべてZoomを用いて行います。別途配布の「大会参加マニュアル」を参照のうえ、最新版のZoomアプリケーションをお手元のパソコンにインストール/アップデートした状態でご参加ください。申し訳ございませんが、Zoomの設定・操作については学会からの援助ができませんので、ご自身で把握いただけますよう、よろしくお願いいたします。
3. A会場には、ブレイクアウトルームとして「休息室・談話室」を設置しております。総会開催中以外の時間帯は常時空いておりますので、情報交換、歓談の場としてご利用ください。

[発表者の方へ]

1. 別途配布の「Zoom発表マニュアル」を参照のうえ、アプリケーションの準備、表示名の変更、発表資料の共有等の操作確認を予めお願いいたします。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて30分です。時間厳守でお願いします。
3. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに事務局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの3つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 別途配布の「Zoom司会マニュアル」を参照のうえ、アプリケーションの準備、表示名の変更等の操作確認を予めお願いいたします。
発表開始10分前までにZoom meetingに入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、事務局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

事前問合せ先：

大会実行委員長 高井次郎 E-mail:

jtakai@cc.nagoya-u.ac.jp

発表・論文について：

事務局 日高 勝之 E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp

事前問合せ及び当日問合せ先：

事務局 宮脇 かおり E-mail: miyawakk@andrew.ac.jp

[Information for Participants]

1. Please register for the annual convention online, using the registration form (<https://peatix.com/event/3246384/view>). The fee is 2,000 yen (non-refundable). The deadline for registration is Sunday, June 5, but please register as early as you can for efficient management of the convention. The information on the participation in the convention will likely to be given later, and the last-minute registration may well not be handled in a timely manner. Participation in panel presentation and individual presentation is limited to those who have paid the registration fee. Anyone can attend the Keynote Address and a Symposium on June 4 (registration is required).
2. The annual convention will be held online exclusively. Please refer to Convention Participation Handout install the latest version of Zoom software. Japan Communication Association will not provide technical support for the software.
3. On June 4 and 5 (except June 5, 14:30-15:15) a breakout room is made for communication among participants. Please use the room to interact other JCA members.

[To Presenters]

1. Please refer to the Zoom Presentation Handout and check in advance how to show your name on screen or share presentation materials on screen using the Zoom software.
2. The time allotted for each presentation is 30 minutes, including questions and answers. Please be punctual to the designated starting and finishing times of the presentation.
3. Should you need to cancel your presentation, please notify the Office of Academic Services in advance. In case of an emergency, please notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please refer to the Zoom Session Chair Handout and check in advance how you show your names on screen.
2. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
3. Strictly adhere to the starting and finishing times of each presentation.
4. In case a presentation is cancelled, do not proceed immediately to the next presentation. Leave the time slot open for the cancelled presentation, and start the next presentation from the designated time. You will be notified of cancellations in advance.

General Inquiry:

Jiro Takai (Program Chair)

E-mail: jtakai@cc.nagoya-u.ac.jp

Inquiry about presentation/papers before the convention:

Academic Affairs (Conference Planning) Katsuyuki Hidaka

E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp

Any inquiry during the convention:

Deputy Secretary General Kaori Miyawaki

E-mail: miyawakk@andrew.ac.jp

スケジュール

第1日 6月4日(土)

	A 会場	B 会場
セッション 1 9:30-11:30	パネル (モノとコミュニケーション) 〈松本、柿田、石黒〉 中西	研究発表 (量的研究手法と自己評価) 〈山口、八代、田崎〉 山口
支部会・昼食 11:40-12:30	Zoom のブレイクアウトルームの機能を利用して開催いたします。 お時間になりましたら、ご所属の支部のルームに入室ください。	
セッション 2 12:45 – 14:15	研究発表 (メッセージ・言説と社会) 〈神戸、船山、小坂〉 花木	パネル (classical communication theory and COVID-19) 〈高井、谷口、胡、王、胡、高〉 高井
総会 14:30-15:15	総 会 司会: 松島綾(JCA 事務局長) 挨拶: 高井次郎 (JCA 会長)	
基調講演 15:30-16:30	会場: 基調講演 (一般公開) 「危機・人間・共同体—令和日本のデザイン—」 基調講演者: 先崎 彰容(日本大学 危機管理学部 教授) 司会: 小西 卓三(昭和女子大学・日本コミュニケーション学会学術局長)	
シンポジウム 16:40-17:50	会場: シンポジウム (一般公開) 「危機とコミュニケーション」 シンポジスト: 先崎彰容(日本大学) 師岡淳也(立教大学) 福本明子(愛知淑徳大学) 司会: 日高勝之(立命館大学・ 日本コミュニケーション学会副学術局長)	

第2日 6月5日(日)

	A 会場	B 会場
セッション 3 9:00-11:00	パネル (日米スピーチ、議論教育) 〈川野、伊藤、松本、田島〉 小西	研究発表 (歴史・社会とコミュニケーション) 〈王、埴、東〉 平野
セッション 4 11:30-13:00	研究発表 (レトリック、 公的言論理論と教育) 〈上土井、青沼、藤巻〉 菅野	

Schedule

Day 1 Saturday, June 4

	Venue A	Venue B
Session 1 9:30-11:30	Panel organized by the Division of Communication Theory Nakanishi	Presentation 1 (Quantitative research method and self-esteem) Yamaguchi
Chapter meeting & Lunch 11:40-12:30	Chapter Meeting will be held using breakout session of Zoom Software. Please enter the zoom meeting of Venue A at 11:40, and then the breakout room of your Chapter.	
Session 2 12:45-14:15	Presentation 2 (Message/discourse and society) Hanaki	Panel (classical communication theory and COVID-19) Takai
General Assembly 14:30-15:15	General Assembly MC: Aya Matsushima Opening Remark: Jiro Takai (JCA president)	
Keynote Address 15:30-16:30	Keynote Address (open to the public) Speaker: Dr. Akinaka Senzaki (Professor, Nihon University) MC: Takuzo Konishi (Showa Women's University)	
Symposium 16:40-17:50	Symposium (open to the public) "Crisis and Communication" Panelists: Akinaka Senzaki (Nihon University) Akiko Fukumoto (Aichi Shukutoku University) Junya Morooka (Rikkyo University) MC: Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)	

Day 2 Sunday, June 5

	A 会場	B 会場
Session 3 9:00-11:00	Panel (Speech and argumentation education in US and Japan) Konishi	Presentation 3 (History, society and communication) Hirano
Session 4 11:30-13:00	Presentation 4 (Theory and education on rhetoric and public discourse) Kanno	

学 術 講 演 Keynote Address

危機・人間・共同体

—令和日本のデザイン—

講演者：先崎 彰容（日本大学 危機管理学部 教授）

現代社会において、「危機」は残念ながら非常に身近な言葉となった。コロナ危機やウクライナ危機に対し、専門的な立場から、現状を正確に説明することはできる。しかし、そもそも「危機」とは何なのか。危機は私たちにとって何をもち、何を意味し、どう生きることを強いてくるのか。

今回の基調講演では、全三章構成で問題提起を行う。第一章では現代社会を俯瞰し、危機の諸事象を貫く構造把握を試みる。第二章では講演者の専門性に鑑み、明治10年に行われた西南戦争をめぐる議論を分析し、「情報」や「イメージ」が個人にもたらす影響を明らかにする。そのうえで第三章では、今一度、現代社会に舞い戻り、私たちがどのような共同体を構成しがちであり、今後、どのような共同性を模索すべきかを、コミュニケーションのあり方の違いを通じて提言したい。

【経歴】

先崎 彰容 （せんざき あきな） SENZAKI, Akinaka

日本大学危機管理学部教授。東京大学文学部卒業、東北大学大学院で博士号を取得。専門は日本思想史。

戦前の日本では、一時「近代の超克」という概念が論じられていたが、そこでは、明治以来の日本の資本主義化（経済）・帝国主義化（政治）・自然主義（文学）といった「近代化」は、はたして正しかったのかが問われていた。様々な分野の学者による、近代化の諸問題を解決するための議論における、「処方箋」にはどんな特徴があったのか。そもそも彼らの時代診察＝近代化にたいする理解は正しかったのか。

これらを踏まえて、研究では近代日本の思想家を複数取り上げ、テキストを読み込む作業を通じて、①彼らの時代理解、近代化理解を明らかにし、②彼らの時代への処方箋の特徴を明らかにし、その可能性と限界を論じてきた。と同時に、思想史の実績を背景に、現代日本社会に対する批評的論考を数多く世に問う。

主な著作に『未完の西郷隆盛』（新潮社）、『ナショナリズムの復権』（筑摩書房）、『国家の尊厳』（新潮社）などがある。

今回の基調講演は一般公開され、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。

<シンポジウム>

危機とコミュニケーション

司会：日高 勝之（立命館大学・
日本コミュニケーション学会副学術局長）

シンポジスト：先崎 彰容（日本大学）
福本 明子（愛知淑徳大学）
師岡 淳也（立教大学）

基調講演を受けて行われる本シンポジウムでは、「危機」を鍵語としてコミュニケーションと関係づけて考えていきたい。2020年から続くコロナ禍、それによって引き起こされた感染拡大の抑制と社会経済活動の両立をめぐる政治社会的混乱や総選挙、コロナ禍の中で開催された東京オリンピック・パラリンピックや急激な円安など、様々な局面において「危機」と考えてよい状況が続いている。世界情勢においても、今年に入ってロシアがウクライナに侵攻し、核兵器の使用、さらには第三次世界大戦の可能性すらゼロではないという事態が進行している。

こうした状況にあって、本シンポジウムでは、先崎先生の講演内容を踏まえつつ、本学会副学術局長の日高勝之(立命館大学)の司会進行のもと、先崎先生と共に、師岡淳也(立教大学)、福本明子(愛知淑徳大学)という、コミュニケーションと政治や文化の接点を研究してきた2人の会員による活発な議論を、会場の方々と交えて展開したい。

今回のシンポジウムは一般公開され、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。

6月4日(土) Saturday, June 4 11:40-12:30

支部会議 Chapter Meetings

Zoomのブレイクアウト機能をもちいて、各支部でミーティングを行います。時間になりましたらご所属の支部のルームに入室ください。

Chapter meetings will be held on Zoom, using the breakout session function. Please enter the zoom meeting of Venue A at 11:40, and then the breakout room of your Chapter.

6月4日(土) Saturday, June 4 14:30-15:15

総会 General Assembly

司会：松島 綾 (立命館大学・日本コミュニケーション学会事務局長)

開会の辞：高井 次郎 (名古屋大学・日本コミュニケーション学会会長)

6月4日(土) Saturday, June 4

時間	会場	プログラム Session																
9:30 11:30	A会場	<p><セッション 1></p> <p>パネル Panel Discussion モノとコミュニケーション—「主体」の所在を問い直す— 司会：中西 満貴典（元岐阜市立女子短期大学） パネリスト：松本 健太郎（二松學舎大学） 柿田 秀樹（獨協大学） 石黒 武人（立教大学）</p>																
	B会場	<p>研究発表 1（量的研究手法と自己評価） Presentation 1 司会：山口 生史（明治大学）</p> <p>1. The Role of Social Functions of Gratitude in the Development of Self-Esteem, Social Anxiety, and Depression Ayano Yamaguchi (Rikkyo University)</p> <p>2. 対面からオンラインへの移行に伴う伝達手法の使用に関する比較実験 —送り手の自己評価と受け手による評価についての考察— 八代 華代子（慶應義塾大学大学院）</p> <p>3. 係留寸描法を用いた回答バイアスの検出および補正の試み 田崎 勝也（青山学院大学）</p>																
11:40 12:30		<p>支部会議 Regional Chapter Meetings</p> <table style="width:100%; border:none;"> <tr> <td>北海道支部</td> <td>Hokkaido</td> <td>東北支部</td> <td>Tohoku</td> </tr> <tr> <td>関東支部</td> <td>Kanto</td> <td>中部支部</td> <td>Chubu</td> </tr> <tr> <td>関西支部</td> <td>Kansai</td> <td>中国四国支部</td> <td>Chugoku & Shikoku</td> </tr> <tr> <td>九州支部</td> <td>Kyushu</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>A会場のブレイクアウトルームの機能を利用して開催いたします。 お時間になりましたら、一旦A会場にお入りの上、ご所属の支部のルームに入室ください。</p>	北海道支部	Hokkaido	東北支部	Tohoku	関東支部	Kanto	中部支部	Chubu	関西支部	Kansai	中国四国支部	Chugoku & Shikoku	九州支部	Kyushu		
北海道支部	Hokkaido	東北支部	Tohoku															
関東支部	Kanto	中部支部	Chubu															
関西支部	Kansai	中国四国支部	Chugoku & Shikoku															
九州支部	Kyushu																	

12:45 14:15	A 会場	<p><セッション 2></p> <p>研究発表 2 (メッセージ・言説と社会) Presentation 2 司会：花木 亨 (南山大学)</p> <p>1. The Politics of Trans Visibility in Japanese Film —A Feminist Film Analysis of Close-Knit (2017) and Midnight Swan (2020)— Naoki Kambe (Rikkyo University)</p> <p>2. アメリカ社会におけるマスク・フォビアと東アジア人の他者化 —米国在住日本人女性のコロナ禍の体験の語り— 船山 和泉 (Sarah Lawrence College)</p> <p>3. 言説的関係性の対話的構築—ラップ作品の動画コメント欄分析から見えてくること— 小坂 貴志 (神田外語大学) 出口 朋美 (近畿大学)</p>
	B 会場	<p>パネル Panel Discussion</p> <p>Are classical communication theories still valid in the age of COVID-19?—Rethinking received theories in anticipation of a paradigm shift—</p> <p>Chair: Jiro Takai (Nagoya University) Presenters: Jiro Takai (Nagoya University) Norihito Taniguchi (Nagoya University) Anqi Hu (Ibaraki University) Lina Wang (Nagoya University graduate student) Xuechen Hu (Nagoya University graduate student) Xingjian Gao (Nagoya University graduate student)</p>
14:30 15:15		<p>総会 General Assembly</p> <p>司会：松島 綾 (立命館大学) 開会の辞：高井 次郎 (名古屋大学・日本コミュニケーション学会会長)</p>
15:30 16:30	A 会場	<p>基調講演 Keynote Address</p> <p>「危機・人間・共同体—令和日本のデザイン—」</p> <p>先崎 彰容 (日本大学 危機管理学部 教授) 司会：小西 卓三 (昭和女子大学・ 日本コミュニケーション学会学術局長)</p>
16:40 17:50	A 会場	<p>シンポジウム Symposium</p> <p>「危機とコミュニケーション」</p> <p>シンポジスト：先崎 彰容 (日本大学) 福本 明子 (愛知淑徳大学) 師岡 淳也 (立教大学) 司会：日高 勝之 (立命館大学・ 日本コミュニケーション学会副学術局長)</p>

6月5日(日) Sunday, June 5

時間	教室	プログラム Session
9:00 11:00	A会場	<p><セッション 3></p> <p>パネル Panel Discussion コミュニケーション教育の新しい潮流—日米のスピーチ・議論教育の現状を踏まえて— 司会：小西 卓三（昭和女子大学） 発表者：川野 優希（立教大学大学院） 伊藤 萌紅（メリーランド大学大学院） コメンテーター：松本 茂（東京国際大学） 田島 慎朗（神田外語大学）</p>
	B会場	<p>研究発表3（歴史・社会とコミュニケーション） Presentation 3 司会：平野 順也（熊本大学）</p> <p>1. 放送児童劇団の研究—場所感の変容と維持の視点から— 王 令薇（京都大学大学院）</p> <p>2. 戦後「ぼやき漫才」と社会規範—当時の視点／現在の視点からの分析— 埴 幸枝（成城大学）</p> <p>3. 菅政権と政治言語力—言葉はどのように政治を動かしたのか?— 東 照二（ユタ大学）</p>
11:30 13:00	C会場	<p><セッション 4></p> <p>研究発表4（レトリック、公的言論理論と教育） Presentation 3 司会：菅野 遼（昭和女子大学）</p> <p>1. パーラメンタリーディベート経験とコミュニケーション指標の関係 上土井 宏太（九州大学大学院）</p> <p>2. レトリックとアジ・プロの間に—近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察— 青沼 智（国際基督教大学）</p> <p>3. キケロの『弁論家について』に公正であること—「発見」の実践と共和主義の幸運— 藤巻 光浩（フェリス女学院大学）</p>

発表要旨

6月4日(土) Saturday, June 4 9:30-11:30 Session 1

A会場
Venue A

パネル
Panel Discussion

モノとコミュニケーション

モノとコミュニケーション —「主体」の所在を問い直す—

司会：中西 満貴典（元岐阜市立女子短期大学）

パネリスト：松本 健太郎（二松學舎大学）

柿田 秀樹（獨協大学）

石黒 武人（立教大学）

コミュニケーション学では、「レトリック」「対人」といった各ジャンルにおいて精緻な研究を進めるといふ営みが「あたりまえ」の状態とされる傾向がある。そのため、ジャンルを超え「コミュニケーションとは何か」という根源的な問いを横断的な立場から議論をする機会は、これまで十分に設定されてきたとは言い難く、当学会の研究活動にもその傾向がみられる。しかし、「コミュニケーション」を考究する団体として、ジャンルを超えてコミュニケーションをめぐる相互の前提を問い直す根源的な営みは重要な課題であるといえる。とりわけ、デジタル技術の急速な発展による社会の変化、自然災害の多発といった状況を踏まえれば、状況に応じ、社会とそこに膺炙する人々の臆見を批判的に変革していくためにも、「コミュニケーション」とそれを探究する学知を再考する機会が必要である。

そこで、昨年新設された「コミュニケーション理論研究会」の企画となる本パネルでは、「コミュニケーション」概念を対象として精査し、それを各領域の知見に拘泥することなく、より学際的かつ横断的に議論するための場として設定する。これにより、学会全体として「コミュニケーション」を考究する学知のあり方を理論的に追究する契機としたい。今回は、コミュニケーションに介在する「モノ」に焦点を当て、モノとコミュニケーションとの関係性について議論をすることで、コミュニケーションにおける「主体」とは何かを様々な角度から議論する。

本パネルでは、各パネリストが、様々な学域から、モノとコミュニケーションという主題に関連する理論的視点および重要文献を提示し、それぞれが依拠する学問的視座を明らかにしていく。発表後には、フロアとの活発な議論を行う。本パネルでは、当学会以外の隣接領域でも学問的に研究されている「コミュニケーション」概念を再考し、「コミュニケーション学」の発展に寄与することを目指す。

6月4日(土) Saturday, June 4 9:30-11:30 Session 1

B会場 Venue B	研究発表1 Presentation 1	量的研究手法と自己評価 Quantitative research method and self-esteem
----------------	-------------------------	--

The Role of Social Functions of Gratitude in the Development of Self-Esteem, Social Anxiety, and Depression

Ayano Yamaguchi (Rikkyo University)

The social functions of gratitude have been associated with low levels of depression in terms of psychopathology in high levels of well-being. However, research on the associations between gratitude and depression in psychopathology in well-being across cultures remains limited. Thus, this study examined the relationship between the social functions of gratitude and depression in psychopathology in well-being using self-esteem and social anxiety as mediating variables. Large numbers of participants were drawn from two samples of middle-aged and older adults in the United States and Japan. Results indicated that individuals in the United States who are more grateful had high levels of self-esteem, which leads to low levels of depression. By contrast, individuals in Japan who are more grateful are less likely to feel social anxiety, which leads to low levels of depression. We also found that self-esteem and social anxiety mediate the relationship between the social functions of gratitude and depression across cultures. The results are discussed with respect to future research and the design and implementation of interventions that include individuals from different cultures.

対面からオンラインへの移行に伴う伝達手法の使用に関する比較実験 —送り手の自己評価と受け手による評価についての考察—

八代 華代子 (慶應義塾大学大学院)

COVID-19の急速な拡大により、企業や教育機関でのコミュニケーションは、対面からオンラインへ急な移行を余儀なくされた。それを機に、対面とオンラインそれぞれの役割を探るため、対比する研究が必要とされている。そこで、本研究では、従来の(対面)の伝達手法に関して対面とオンラインの比較実験を行い、送り手と受け手の評価から使用の違いがあるかを明らかにする。

対面とオンラインの比較研究は、非言語情報の違いを検討しているものが多いが、本研究では、伝達手法の使用の違いを比較する。実験の仮説は、以下の通り。

- a.伝達手法の使用についての送り手の自己評価は、対面とオンラインに違いがない
- b.送り手の伝達手法の使用についての受け手による評価は、対面とオンラインに違いがない

送り手 24 の有効回答に対応のある t 検定、受け手 48 の有効回答に対応のない t 検定を行い、分析した結果、2 つの仮説は棄却された。つまり、従来（対面）の伝達手法の使用について、送り手と受け手いずれも対面とオンラインに違いを感じ、その違いはオンラインの優位性を示した結果となった。そして、送り手は視覚に訴える伝達手法、受け手には聴覚に訴える伝達手法も有用であることが示唆された。これは、これからも続くオンラインコミュニケーションにおいて、さらに有効に機能する伝達手法の研究、開発の必要性を示唆する結果となった。今後は、順序効果と参加者の属性の影響が課題である。

係留寸描法を用いた回答バイアスの検出および補正の試み

田崎 勝也（青山学院大学）

本研究は回答バイアスを原因となる「尺度の不定性」(arbitrariness)の問題に着目し、米ハーバード大学の教授 Gary King 氏によって見出された「係留寸描法」(Anchoring Vignettes、以下 AV)を用いてバイアスの検出・補正を試みる (King, Murray, Salomon, & Tandon, 2004)。AV 法とは仮想の人物や事象についての評価をもとに、相対的な位置関係から、自己評価基準の個人差を補正し、尺度の不定性を解決しようとする試みである。

都内私立大学に通う大学生 215 名に、欧州国際比較調査で用いられた健康状態に関する自己評価項目と 3 つの AV 項目を尋ねた。AV 項目には痛みの強さの異なるシナリオが設定されており、AV 項目への評価を基に King (2020) により提案されたノンパラメトリック法を用いて、回答者自身の痛みの程度の再スケールを試みた。

1 サンプルの t 検定の結果、自己評価得点の平均値 1.95 点 (SD=1.03) は再スケール得点の平均値 1.67 点 (SD=0.93) より有意に高かった ($t(212)=-4.45, p<.001, d=.31$)。また、再スケール得点による質問内容の異なる尺度への補正が検討されており (Kyllonen & Bertling, 2014)、幸福感尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) 5 項目への修正を検討した。尺度得点の男女差は、女性 (M=3.44, SD=0.95) が男性 (M=3.06, SD=0.97) より幸福感が高い ($t(206)=-2.77, p<.01$)。痛みの自己評価得点と再スケール得点との差分を共変量とした共分散分析を行ったところ、推定周辺平均ではわずかだが性差が鮮明化した (男性 : M=3.02, SE=0.11 ; 女性 : M=3.45, SE=0.08)。

引用文献

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). Satisfaction with Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- King, G. (2020, August 17). 19. *Anchoring Vignettes*. [Video file].
<https://www.youtube.com/watch?v=8xUQNJAawZS8>
- King, G., Murray, C.J.L., Salomon, J.A., & Tandon, A. (2004). Enhancing the validity and cross-cultural comparability of measurement in survey research. *American Political Science Review*, 98, 191-207.
- Kyllonen, P.C., & Bertling, J.J. (2014). Innovative questionnaire assessment methods to increase cross-country comparability. In L. Rutkowski, M. von Davier, & D. Rutkowski (Eds.), *Handbook of international large-scale assessment: Background, technical issues, and methods of data analysis* (pp.277-286). Boca Raton, FL: CRC press.

6月4日(土) Saturday, June 4 12:45-14:15 Session 2

A会場
Venue A

研究発表
Presentation 2

メッセージ・言説と社会
Message/discourse and society

The Politics of Trans Visibility in Japanese Film

—A Feminist Film Analysis of *Close-Knit* (2017) and *Midnight Swan* (2020)—

Naoki Kambe (Rikkyo University)

Transgender people or “those who move away from the gender they were assigned at birth” (Attwood 10) have always existed in our society. The public now begins to witness more and more diverse transgender characters in the media. As Reina Gossett, Eric Stanley, and Johanna Burton argue, this change or increasing trans visibility in the media, however, does not function as a remedy or “teaching tool” for broader acute social crises (xv), nor does it guarantee social acceptance of transgender people. In turn, we fall into, what they call, “the trap of the visual” (xv) or a politics of visibility “where being seen can gesture misrecognition” (Feldman 2). This paper attempts to locate the discourses that construct misrecognition of transgender people through analyzing some recent Japanese mainstream films whose stories center on/around a transwoman and her life, motherhood, and “family.” In particular, it will analyze the film *Karera ga Honki de Amu Toki wa* (*Close-Knit*) (2017) directed by Naoko Ogigami and *Midnight Swan* (2020) directed by Eiji Uchida. Through this feminist film analysis, it concludes that these films not only emphasize and strengthen stereotypical images of transwoman and heteronormativity but also glorify the patriarchal structure of family and woman’s gender roles in Japan by idealizing a normative family and a daughter-mother relationship.

Work Cited

Attwood, Feona. *Sex Media*. Medford: Polity, 2018.

Feldman, Zeena. “Introduction: Why Visibility Matters.” *Art and the Politics of Visibility*, edited by Zeena Feldman, pp. 1-20. London: I. B. Tauris, 2017.

Gossett, Reina, Eric A. Stanley, and Johanna Burton. “Known Unknown: An Introduction to Trap Door.” *Trap Door: Trans Cultural Production and the Politics of Visibility*, edited by Reina Gossett, Eric A. Stanley, and Johanna Burton, pp. xv-xxvi. Cambridge: The MIT Press, 2017.

Karera ga Honki de Amu Toki wa (*Close-Knit*). Directed by Naoko Ogigami, Suurkiitos, 2017.

Midnight Swan. Directed by Eiji Uchida, Kino Films, 2020.

アメリカ社会におけるマスク・フォビアと東アジア人の他者化 —米国在住日本人女性のコロナ禍の体験の語り—

船山 和泉 (Sarah Lawrence College)

本研究は、コロナ危機によりアメリカ社会における黄禍論が再燃し、そのいわばシンボルともなった「マスク」が、人間を他者化し人間性を剥奪することをより容易とする非言語コミュニケーションとなってしまった社会現象について論ずるものである。特に「東アジア人の外見」を持つ者としてのエスニシティの具現化が、「マスク」という“シンボル”によって如何に活性化されたかということについての体験について、在米日本人女性らとインタビューをデータとした「語り」を通して考察する。コロナ禍の初期において米国では、東アジア地域にルーツを持つ人々の間で他の人たちに先んじてマスク姿が見られるようになった。しかし病人か「気狂い」だけがマスクを着用するというのが長らく社会通念であったアメリカ社会において、そのことは“マスク・フォビア”すなわち“マスク嫌い”とでも呼べるような現象を引き起こす。マスク姿は、Tchen と Yeats (2014)の言葉を使えば「標準的なアメリカ的自己」(=the normative American Self) (p.5) と相反するものであるが故に、マスク姿の人間を他者化し人間性を剥奪することは容易となる。さらに、コロナ感染拡大に対しての不安や恐怖を、「標準的なアメリカ人」とは違うマスク姿の人間に投影することで、この問題は自分たちの問題ではなく“マスクをしている”(ゆえに標準的なアメリカ人とは違う) 東アジア人の問題なのであると捉えることが容易となる。そしてマスク姿の東アジア人を排除・攻撃することは、コロナ感染拡大に対しての不安や恐怖を排除・攻撃することであるという論理が成立する。コロナ渦中のアメリカ社会で生きる東アジア人の外見を持つ人間にとって、マスクをすることは(場合によっては新型コロナウイルス・ウイルス感染以上の) リスクだったのである。

引用文献

Tchen, J.K.W., and Yeats, D. (Eds). (2014). *Yellow peril!: An archive of anti-Asian fear*. Verso.

言説的關係性の対話的構築

—ラップ作品の動画コメント欄分析から見えてくること—

小坂 貴志 (神田外語大学)

出口 朋美 (近畿大学)

SNS などのデジタル・コミュニケーションは、ユーザー同士の双方向性が容易に実現されるため、単方向型とは比べものにならないほど、そこに関与するチャンネル運営者やユーザー同士が互いに良くも悪くも影響を及ぼし合う。

対話論において、差異に象徴される言説が及ぼす対話プロセスへの影響を把握する目的で、Web フォーラムでのユーザー同士の対話的關係構築の研究がおこなわれている。Witteborn

(2011) は、ウイグル・アメリカ協会の仮想フォーラムでやりとりされたメッセージを対話的に分析し、対話を阻害する要因として (1) ラベル化 (labeling) 「ウイグル」、「中国」など民族国家に関するラベル化を用いることで対話の相手との間に垣根を作る、(2) 真実語り (truth talk) 主に政治的話題に関して何が真実なのかを強調する、(3) 不信感 (distrust) 発話者を中国のスパイかもしれないと疑う、の3つをあげ、対話的言説空間において生成された差異が対話を阻害する方向に向かわせていると結論付けている。本研究は、Witteborn (2011) の研究手法に依拠し、YouTube 動画に寄せられたコメント欄を分析することで、ラップ・シーンにおける対話的關係性構築のプロセスを理解することを目的とする。

本研究にて分析の対象としたのは、日本人を両親に持ち、ドイツのデュッセルドルフで生まれ育ったラッパーの Blumio (本名は國吉史生) の代表作である Hey Mr. Nazi と同じ撮り方で、異なったメロディーと歌詞で作られた Hey Mr. Japan である。ラップ作品の視聴により、楽曲の評価だけでなく、オーディエンスらが自らの経験を自省し、より深く理解する機会となっている様子がコメント欄を通して伺い知ることができた。今回取り上げたラップ作品以外にも、特に差異と対話的關係性構築の關係性分析を深められるよう、今後の研究課題としたい。

引用文献

Witteborn, S. (2021) Discursive grouping in a virtual forum: Dialogue, difference, and the “Intercultural.” *Journal of International and Intercultural Communication*, 4(2), 109-126.

6月4日(土) Saturday, June 4 12:45-14:15 Session 2

B会場 Venue B	パネル Panel Discussion	Classical communication theory and COVID-19
----------------	-------------------------	--

Are classical communication theories still valid in the age of COVID-19?

—Rethinking received theories in anticipation of a paradigm shift—

高井次郎 (名古屋大学)

谷口紀仁 (名古屋大学)

胡安琪 (茨城大学)

王麗娜 (名古屋大学大学院)

胡雪晨 (名古屋大学大学院)

高行健 (名古屋大学大学院)

The new normal created by COVID-19 has obviously changed the way people communicate. The need for social distancing has warranted massive use of communication technologies. Our inability to meet people face-to-face has introduced us to video conferencing, and accelerated our use of SNS. Being forced to stay home has restricted our shopping to online sources, and directed us to engage in pastime activities over on-demand stream TV, while some have even engaged in online gaming and gambling. Human interaction, then, have become just as electronic, as is face-to-face, and this trend can be expected to continue on post-pandemic, urging a sudden paradigm shift in communication research. Much of the existing theories have been formulated under the assumption that people communicate in the face-to-face context, presuming that communication is spontaneous, and that the nonverbal channel can be implemented in its entirety. However, our recent lifestyles now allot us less face-to-face, and more mediated communication, so a drastic change in our communication cognitions, motives, and behaviors have occurred, and our interpersonal relationships are now maintained by both forms. We address this issue by questioning the viability of existing theories of communication, making suggestions on how they can be adapted or modified to meet the new normal. Our panel will cover the areas of intercultural, intergroup, interpersonal, computer mediated, and health communication.

6月5日(日) Sunday, June 5 9:30-11:30 Session 3

A 会場 Venue A	パネル Panel Discussion	日米スピーチ、議論教育 Speech and argumentation education in the US and Japan
-----------------	-------------------------	--

コミュニケーション教育の新しい潮流

—日米のスピーチ・議論教育の現状を踏まえて—

司会：小西 卓三（昭和女子大学）

発表者：川野 優希（立教大学大学院）

発表者：伊藤 萌紅（メリーランド大学大学院）

コメンテーター：松本 茂（東京国際大学）

コメンテーター：田島 慎朗（神田外語大学）

口頭発表のための年次大会と論文発表のための学術誌は、JCAの主要な場/メディアとして機能してきた。しかし、世代を超えて学を継承したり萌芽的なアイデアを提示する場/メディアをJCAが積極的に作り出してきたかは、議論の余地がある。本パネルはそのような議論を意識的に迂回し、その一方で大学院生に場/メディアを実際に提供し、コミュニケーション教育の新たな潮流を考察する。本パネルは、それぞれの発表原稿に事前に目を通したコメンテーターが、内容にコメントする発表を行い、その後に参加者の議論を行う。この形式は、発表されるアイデアの建設的かつ十分な検討を可能とする。

第一発表者の川野は、「日本の大学におけるスピーチ/プレゼンテーション教育の現状と課題について」という日本語発表を行う。日米でスピーチ教育にかかわってきた13名へのインタビュー、スピーチ/プレゼンテーション教科書の分析を踏まえて、日米のスピーチ/プレゼンテーション教育の共通点・相違点および、日本のスピーチ/プレゼンテーション教育の現状と課題を整理する。第一発表者へのコメントは、松本が行う。

第二発表者の伊藤は、“*Toward Anticolonial Ethical Argumentation: Decentering Western Thought Through Interdependent Networks*”という英語発表を行う。議論とディベート(argumentation and debate)の諸理論はグレコ・ローマン文化に端を発する述語に依拠するが、伊藤は反コロニアルな倫理的討議(anticolonial ethical argumentation)を教える手順を提示する。第二発表者のコメントは、田島が行う。

二つの口頭発表、コメント、参加者の議論を通し、日米のスピーチ・議論教育を検討し、新たなコミュニケーションの知見を紡ぐ場/メディアとして本パネルが機能することをパネル参加者は企図している。

6 月 5 日 (日) Sunday, June 5 9:00-11:00 Session 3

B 会場
Venue B

研究発表 3
Presentation 3

歴史・社会とコミュニケーション
History, society and communication

放送児童劇団の研究
—場所感の変容と維持の視点から—

王 令薇 (京都大学大学院)

本研究は、NHK 名古屋児童劇団 (1948 年～) の歴史への考察を通して、放送局の児童劇団という特定の場所でどのような教育が期待・実行されたのかを検討するものである。

メイロウィッツ (1985=2003) は、ラジオ・テレビをはじめとした電子メディアが「場所感の喪失」(no sense of place)、つまり物理的場所と社会的「場所」の分離をもたらしたと論じている。この視点より、放送は、物理的場所をどのように越えられたのかを中心に議論・研究が行われてきた。それらに対し、本研究は、あえて教育を意図した対面コミュニケーションの場所が放送局によって設立・維持されているという現象に着目し、日本における放送文化の特徴を再考したい。

放送児童劇団とは、ラジオ・テレビのための児童演技者の提供を主な目標とする施設である。当時の資料はほとんど残されていないので、放送児童劇団に関する研究はほとんど見られない。放送史における言及も少ない。本稿で扱う NHK 名古屋児童劇団に関しては、NHK 名古屋放送局制作の長寿番組『中学生日記』と関わりを持ち続け、資料はある程度残っている。すでに同劇団の担当者が『NHK 名古屋児童劇団 70 周年』にまとめているが、本研究は、上述した場所感の視点とこの記念誌を含めた周辺資料からこの児童劇団の歴史を浮き彫りにしたい。具体的に、この記念誌のほか、NHK 名古屋児童劇団で現在講師を務めている方々への聞き取り調査、日本児童・青少年演劇劇団協同組合の資料、ホームページ掲載情報などを扱う。

これまでの考察により次のことがわかった。「場所感の喪失」をもたらした放送の内容制作を支えるために、児童劇団という対面コミュニケーションが重要視される場所は創設され、またネット社会においてコミュニケーション能力の勉強のための場所として依然必要とされている。これからは、この場所に与えられる意義を、同時代のメディアと児童演劇の状況とともにさらに検討していきたい。

戦後「ぼやき漫才」と社会規範 —当時の視点／現在の視点からの分析—

埴 幸枝 (成城大学)

漫才は社会のコードを前提として成り立つものであるという点で、社会的な側面を帯びている。本研究では戦後日本における「ぼやき漫才」(人生幸朗・生恵幸子の夫婦漫才)を取り上げ、その「語り」を二つの視点——第一に当時の社会的文脈からそれを検討する視点、第二に現在の社会的文脈からそれを検討する視点——に依拠しながら分析することで、漫才と社会規範の関係を明らかにする。分析対象となる「ぼやき漫才」では、戦後に登場した新たな文化の流行(とりわけ、若い女性のファッションや振る舞いなど)が揶揄の対象とされる。ここに「高齢男性(=旧来の文化的コード)／若い女性(=新たな文化的コード)」の対立構造が示されているのは明らかである。漫才と社会背景との照合をつうじて、当時の社会が「旧来的な文化／新たな文化」のはざままで保持していた規範を明らかにする。他方で、当時の漫才で示された事柄が、現在の社会的文脈においても同じように笑えるとは限らない。現在の感覚からすれば、上記の「ぼやき漫才」における発言が男性中心主義を背景とした「女性蔑視」を含むことは明らかであり、それに対しては「差別的で許容できない」「不快である」などの否定的反応があげられる。このことから、「笑いの許容範囲」の変動が社会規範の変化にともなって生じることが理解できる。本研究では漫才をめぐる表象の水準のみならず、人々がそれをどのように解釈しうるのかという水準をも視野におさめつつ、漫才(笑い)と社会のつながりを探る。

菅政権と政治言語力 —言葉はどのように政治を動かしたのか?—

東 照二 (ユタ大学)

人文社会系、自然科学系を問わず、最近、特に注目を集めてきているのが、多様性に注目し、幅広く人間性そのものを追求し、多文化理解を広めていく、そして個人的、社会的な価値観を深めていくという、多言語・多文化的・俯瞰的なアプローチである。そして、今後ますます、広まっていく「多文化共生社会」では、一国だけに通用する、限られた政治家の発言力を、もっと広範な枠組みで見直していくことも必要になるであろう。

その際、政治家の言語力、特に、国家的危機といってもいいような新型コロナ感染の状況にある日本では、どのように政治が語られている（いた）のであろうか。かつて、江戸時代の「役人」という言葉には、「上司の命令」であるからとして、明快な答えを回避する傾向が特に強かったと言われている。この明確な答えを「避ける」というスタイルは、限られた政治家のものというよりは、それを超えて、どうも日本の伝統文化の一部と言ってもいいようだ。そしてこの「責任能力の回避」に優れた人が、現在の日本においても、多くの政治家、あるいは一国のリーダーの資質になってはいないだろうか。この観点から、ここでは2020年9月から1年間、日本の政治リーダーであった菅義偉総理を中心にして、言語の特徴、変遷について考えて見ることにする。さらに、政治言語学の視点として、社会言語学者のタネンの主張などを紹介しながら、政治家の言葉を概括してみることにしよう。

6月5日(日) Sunday, June 5 11:30-13:00 Session 4

A 会場 Venue A	研究発表 4 Presentation 4	レトリック、公的言論理論と教育 Theory and education on rhetoric and public discourse
-----------------	--------------------------	---

パラメンタリーディベート経験とコミュニケーション指標の関係

上土井 宏太 (九州大学大学院)

パラメンタリーディベート (PD) は、世界中で広く行われている即興型ディベートの形式であり、日本においても競技ディベートとしてだけでなく、中学校、高校での授業でも扱われるようになり、教育手法として注目を集めている。ディベートの教育効果に関する研究は広く行われており、スピーキング能力、ライティング能力、批判的思考力など、様々な分野での教育効果が報告されているが、PD を扱った報告は一部を除いて限られている。

本研究で注目するのは PD 経験によるコミュニケーション指標への影響である。具体的には多数の先行研究が扱っている Communication Competence、Communication Apprehension、Argumentativeness、Willingness to Communicate の 4 つを対象として、PD 経験の有無による指標の値の違いに関して分析を行った。その結果、Communication Competence 以外の 3 つの指標について統計的に有意な差が確認された。更に、Communication Apprehension については、サブスコアについて更なる分析を行い、PD 経験の有無による差について詳細な分析を行った。また、PD 経験の有無、性別の 2 つをパラメタとしてクロス分析を行った結果、PD 経験によるコミュニケーション指標への影響について、男女間で差が見られた。

発表ではこれらの結果について包括的に報告し、PD 経験のある男女間の指標の差について、日本における競技ディベート、教室ディベートのコンテクストを踏まえながら分析を試みる。更に今後の展望として、ディベート研究における課題、限界についても議論する予定である。

レトリックとアジ・プロの間に —近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察—

青沼 智（国際基督教大学）

明治初期、西洋より日本に輸入されたレトリックは、自由民権運動の波に乗り「弁論ブーム」を巻き起こし、そのスピリットは大正デモクラシーに引き継がれた。やはり明治初期日本に持ち込まれたマルクス・エンゲルスの思想が知識層に多大な影響を与え、明治後期・大正期にかけての（非合法）社会主義・共産主義政党や（合法）無産政党の設立、さらには昭和初期の「プロレタリア文学運動」等、20世紀初頭、大きな盛り上がりを見せたこともよく知られている。

ただし残念なことに、近代日本の言論界を席卷したこれら二つの接点に関する私たちの学識・知見は限られている。社会主義作家の雄弁や、マルクス主義（にシンパシーを持つ）哲学者として名を馳せた三木清が弁論専門誌『雄辯』の読者であった等、断片的なエピソードの羅列の域を出ないと言わざるを得ない。またそれ以前に、大正・昭和初期のレトリックに関する研究は、明治初期と比較すると極端に少ないのが現状である。これらのギャップを埋めるべく、本研究では1930（昭和5）年発行『プロレタリア雄弁学』（平凡社）の分析を行う。近藤栄蔵（1883—1965）により著された本書は、古代ギリシャ・ローマ時代から培われたレトリックを無産階級（プロレタリアート）に授けることを試みる、非常に意欲的なレトリック指南書である。波多野完治は、近代日本のレトリックの「不幸」として、「マルクス主義の「宣伝扇動論」に、演説の地位が確立されていなかったこと」をかつてあげたが、この評価は果たして妥当だろうか。本研究では特にこの、マルクス・レーニン主義の政治言説戦略たる「宣伝扇動＝アジ・プロ（agitation and propaganda）」と近藤が描いたプロレタリア雄弁との関係を歴史的・理論的に考察したい。

キケロの『弁論家について』に公正であること —「発見」の実践と共和主義の幸運—

藤巻 光浩 (フェリス女学院大学)

本論では、キケロの『弁論家について (*De Oratore*)』における弁論術・雄弁に関する、レトリックという学からの思想史上の解釈の枠組みを、これまでとは異なる視点から提示してみたい。奇妙に思われるかもしれないが、キケロに関しては、レトリック以外の視点からの読みが各方面で浸透してきた。例えば、キケロによる手紙の写本を発見したペトラルカ以後のスカラシップは、文芸の伝統の中で読まれてきたし、また哲学者アリストテレスの『弁論術』を踏まえた術として認識されてきた。したがって、このような認識の中で定着した『弁論家について』における「レトリック」は、必ずしもそれ自体にとっては公正なものではなかったように思われる。

本論では、まず『弁論家について』においてキケロが実践していることが、これまでの読みとは異なる認識の枠組みを要求していることを提示してみたい。そのためには、これまでアリストテレスによる『弁論術』との関係で定位されてきた『弁論家について』を、イソクラテスを始めとする政治弁論家やソフィストによる教育の伝統の中に位置づける。中でも、第1巻における対話篇を取り上げ、「発見 (*inventio*)」の役割の大きさに注目する。通常は、第2巻に「発見」に関する議論が叙述されていることが指摘されているのだが、本論では、「学識ある弁論家 (*doctus oratore*)」をトピックとした第1巻にこそ、弁論術について記したキケロの思想が凝縮していることを手掛かりとしたい。とかく弁論術というと、言葉の詞藻の工夫に執着する術であると文芸や哲学分野においては認識されてきたが、この対話篇が「発見」のための両論 (*δισσοι λόγοι*) によって構成されていること、そして本作品が古典共和主義を担う教育的な手引書であったことを提示したい。

日本コミュニケーション学会
第 51 回年次大会
プロシーディングス
2022 年

**Japan Communication Association
51st Annual Convention Proceedings**

目次

Contents

[パネル] コミュニケーション理論研究会

モノとコミュニケーション

—「主体」の所在を問い直す—..... 30

司会：中西 満貴典（元岐阜市立女子短期大学）

パネリスト：松本 健太郎（二松學舎大学）

柿田 秀樹（獨協大学）

石黒 武人（立教大学）

[パネル] Classical communication theory and COVID-19

Are classical communication theories still valid in the age of COVID-19?—Rethinking received theories in anticipation of a paradigm shift—..... 33

Chair: Jiro Takai (Nagoya University)

Presenters: Jiro Takai (Nagoya University)

Norihito Taniguchi (Nagoya University)

Anqi Hu (Ibaraki University)

Lina Wang (Nagoya University graduate student)

Xuechen Hu (Nagoya University graduate student)

Xingjian Gao (Nagoya University graduate student)

[パネル] 日米スピーチ、議論教育

コミュニケーション教育の新しい潮流

—日米のスピーチ・議論教育の現状を踏まえて—..... 35

司会：小西 卓三(昭和女子大学)

発表者：川野 優希（立教大学大学院）

伊藤 萌紅（メリーランド大学大学院）

コメンテーター：松本 茂（東京国際大学）

田島 慎朗（神田外語大学）

量的研究手法と自己評価

Quantitative research method and self-esteem

The Role of Social Functions of Gratitude in the Development of Self-Esteem, Social Anxiety, and Depression. . . . 38

Ayano Yamaguchi (Rikkyo University)

対面からオンラインへの移行に伴う伝達手法の使用に関する比較実験

—送り手の自己評価と受け手による評価についての考察— 41

八代 華代子 (慶應義塾大学大学院)

係留寸描法を用いた回答バイアスの検出および補正の試み 45

田崎 勝也 (青山学院大学)

メッセージ・言説と社会

Message/discourse and society

The Politics of Trans Visibility in Japanese Film

—A Feminist Film Analysis of Close-Knit (2017) and Midnight Swan (2020)— 48

Naoki Kambe (Rikkyo University)

アメリカ社会におけるマスク・フォビアと東アジア人の他者化

—米国在住日本人女性のコロナ禍の体験の語り— 50

船山 和泉 (Sarah Lawrence College)

言説的関係性の対話的構築—ラップ作品の動画コメント欄分析から見えてくること— 53

小坂 貴志 (神田外語大学)・出口 朋美 (近畿大学)

歴史・社会とコミュニケーション

History, society and communication

放送児童劇団の研究—場所感の変容と維持の視点から—..... 56

王 令薇（京都大学大学院）

戦後「ぼやき漫才」と社会規範—当時の視点／現在の視点からの分析—..... 58

埴 幸枝（成城大学）

菅政権と政治言語力—言葉はどのように政治を動かしたのか？—..... 60

東 照二（ユタ大学）

歴史・社会とコミュニケーション

Theory and education on rhetoric and public discourse

1. パーラメンタリーディベート経験とコミュニケーション指標の関係..... 62

上土井 宏太（九州大学大学院）

2. レトリックとアジ・プロの間に—近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察—..... 64

青沼 智（国際基督教大学）

3. キケロの『弁論家について』に公正であること—「発見」の実践と共和主義の幸運—..... 66

藤巻 光浩（フェリス女学院大学）

モノとコミュニケーション

—「主体」の所在を問い直す—

司会：中西 満貴典（元岐阜市立女子短期大学）

パネリスト：松本 健太郎（二松學舎大学）

柿田 秀樹（獨協大学）

石黒 武人（立教大学）

コミュニケーション学では、「レトリック」や「対人」といった各ジャンルにおいて精緻な研究を行うという営みが「あたりまえ」の状態とされる傾向がある。そのため、ジャンルを超え「コミュニケーションとは何か」という根源的な問いを横断的な立場から議論をする機会は、これまで十分に設定されてきたとは言い難く、当学会の研究活動にもその傾向がみられる。しかし、「コミュニケーション」を考究する団体として、ジャンルを超えてコミュニケーションをめぐる相互の前提を問い直すような根源的な営みは重要な課題であるといえる。とりわけ、デジタル技術の急速な発展による社会の変化や自然災害の多発といった状況を踏まえれば、状況に応じ、社会とそこに膺灸する人々の臆見を批判的に変革していくためにも、「コミュニケーション」とそれを探究する学知を再考する機会が必要である。

昨今、コミュニケーションをめぐるデジタル化とそれに伴われる社会的状況の変化には目をみはるものがある。スマートフォンなどのモノ（デジタル機器）がコミュニケーションを文脈化し、そうしたコミュニケーションを基盤として人間関係が形成され、社会的状況を作り上げている。また、社会で起こる様々な事象へ対応するうえで、デジタル技術が用いられ、新型コロナウイルス感染拡大に対して、Zoomといったツールの導入という非対面型のコミュニケーションが日常的なものとなり、学校の授業、企業の会議や接客、病院の診療といった社会の様々な局面に影響を与えている。さらに、LINE、Twitter、Instagramといったソーシャルメディアとその機能を通じたコミュニケーションでは、他者との間のコンテクストを手軽に新設したり、加工したりできるため、若者たちの多くは複数のコミュニケーション媒体を用い、あるいは、ときにそれらを組み合わせて（それも自らの所属する文化的グループの基準に応じて）情報世界を巧みにカスタマイズしようとする。

おそらく1990年代を分水嶺とするインターネット普及の後、ならびに、阪神淡路大震災・東日本大震災、世界各地でみられる山火事や巨大台風といった自然災害、パンデミックを経験する時代においては、人間以外の「主体」を認めざるを得ず、また、それは主客の認識論を超えた何かとして、新たに考察せざるを得ない状況であるといえる。こうした状況を受け、学術的にも、デジタル機器や自然を含めたモノ、すなわち、人間以外の存在に着目し、「コミュニケーション」そのものを問い直し、またそれを理論化し、変化するモノと人間の関係、そしてコミュニケーションするモノのありかたに応じてアップデートする試みが充分かといえ、（当学会の営為に限っていえば）必ずしもそうとはいえないのではないだろうか。

とはいえ、「コミュニケーション」は、現代を語るもっとも重要な鍵概念として認識されつつあり、当学会の外部でも、それをめぐる学問的な議論が様々なかたちで展開されている。「承認」「参加型社会」「心権力」「写交性」「プラットフォーム」「アテンション・エコノミー」「多孔化」「コミュニケーション消費」「オートファジー」など——このうち、どのような用語を俎上に

載せることもできる。それらは現代における「コミュニケーション」概念、あるいは、それをめぐる「コミュニケーション文化」の変容を直接的にも間接的にも示唆するものとして、メディア論、社会学、人類学、生物学、記号論などの各領域で議論されつつある。

ともあれ、以上のような「コミュニケーション」をめぐる研究動向を勘案したとき、私たちは学会外における諸言説を視野に入れつつも、学会内における議論をさらに進展させる必要があるといえるだろう。ジグムント・バウマンが論及するリキッドモダンの状況において、人びとのコミュニケーション活動やそれをめぐる文化の何が変化し、それをいかに理論化する必要があるのか。あるいは、既存のコミュニケーション研究をめぐる何が有効で、何がすでに通用しなくなりつつあるのか。さらにいえば、新しい時代に要請される「コミュニケーション」概念、「コミュニケーション学」とは何であるのか。私たちはこれらの問いを学会での議論を通じて冷静に見極め、それをコミュニケーション学の体系のなかへと新たに落とし込み、随時それを更新していく必要があるのではないだろうか。

新設の「コミュニケーション理論研究会」の第2回目の企画となる本パネルは、「コミュニケーション」概念を研究の対象として精査し、それを専門分化した各領域の知見に拘泥することなく、より学際的かつ横断的に議論するための場として設定されたものである。これによって、学会全体として「コミュニケーション」および「コミュニケーション学」のあり方を理論的に追究する契機を模索したい。

本パネルでは、各パネリストが「モノとコミュニケーション」という主題に対して、それに関連する理論的視点および重要文献を提示し、それぞれが依拠する学問的視座を明らかにしていく。なお、各自が理論的に依拠する文献に関しては一切の制限は設けておらず、したがって学術的出典以外から提示される可能性もある。それぞれの発表後には、参考文献にも言及しながら、パネリスト間のみならず、パネリストとフロアの間でも活発な議論を行う予定である。

以下、それぞれの登壇者の専門および研究業績について略記しておく。司会をつとめる中西満貴典（元岐阜市立女子短期大学）は、これまでレトリック批評、記号論の視点から研究をおこなっており、「オラルの世界からみた空間・時間概念の研究」をテーマとしている。松本健太郎

（二松学舎大学）は映像記号論、デジタルメディア論、観光コミュニケーション論の視点から研究を行っており、デジタルテクノロジーによる想像力の変容を研究上のテーマとしている。柿田秀樹（獨協大学）はコミュニケーションのメタ理論としてのレトリック理論を専門とし、これまでレトリックと哲学の関係を批判的に問い直しつつ、ギリシア時代から考察されるアートとしてのレトリックを美術史と視覚芸術を踏まえ、表象文化論や美学の理論的視点から研究している。石黒武人（立教大学）は、異文化コミュニケーション研究、組織ディスコース研究に依拠し、質的研究法を用いて多文化チームで協働する日本人上司と多国籍なメンバーとのコミュニケーションを研究している。

学会創設 51 年目という新たなスタートを迎えるにあたり、「コミュニケーション」および「コミュニケーション学」の理論的な問い直しは、当学会の社会的および学術的な知的営為の体系的な位置づけ、および、これを担う研究者による自己の知的営みとその所産の思議という双方の側面において重要性をもつ。「コミュニケーション」概念を精査し、学際的かつ領域横断的に議論することは会員数や大会での発表数の減少という「危機」が本大会テーマと直結する問題でもあり、本パネルが本学会のあり方を根源的に問い直す一つの機会とな（りえ）ることを期待している。このシリーズ企画パネルは、以上のような設定によって、当学会以外の隣接領域でも学問的に研究され、前景化されている「コミュニケーション」概念を改めて再考することで、学問領域とし

での「コミュニケーション学」の発展に寄与することを目指す。

Are classical communication theories still valid in the age of COVID-19?

—Rethinking Received Theories in Anticipation of a Paradigm Shift—

Chair: Jiro Takai (Nagoya University)

Presenters:

Jiro Takai (Nagoya University)

The *new normal* and its resulting paradigm shift in communication research

Norihito Taniguchi (Nagoya University)

Intercultural communication through virtual exchange programs

Anqi Hu (Ibaraki University)

Revisiting Allport's Contact Hypothesis

Lina Wang (Nagoya University graduate student)

Communication apprehension and the new normal

Xuechen Hu (Nagoya University graduate student)

Modifying the Theory of Planned Behavior in the health context

Xingjian Gao (Nagoya University graduate student)

Online and offline self-disclosure and well-being

The *new normal* created by COVID-19 has obviously changed the way people communicate. The need for social distancing has warranted massive use of communication technologies. Our inability to meet people face-to-face has forced us to hold meetings via video conferencing, and accelerated our use of SNS. Being forced to stay home has restricted our shopping to online sources, and directed us to engage in pastime activities over on-demand stream TV, while some have even engaged in online gaming and gambling. Human interaction, then, have become just as electronic, as is face-to-face, and this trend can be expected to continue on post-pandemic, urging a sudden paradigm shift in communication research. Much of the existing theories have been formulated under the assumption that people communicate in the face-to-face context, presuming that communication is spontaneous, and that the nonverbal channel can be implemented in its entirety. However, our recent lifestyles now allot us less face-to-face, and more mediated communication, so a drastic change in our communication cognitions, motives, and behaviors have occurred, and our interpersonal relationships are now maintained by both forms. We address this issue by questioning the viability of existing theories of communication, making suggestions on how they can be adapted or modified to meet the new normal. Our panel features some of the members of the Social Psychology/Communications laboratory of Nagoya University, covering the areas of intercultural, intergroup, interpersonal, health, and mediated communication.

First, Jiro Takai will talk about the need for a paradigm shift in communication research after the pandemic. In particular, interpersonal communication has largely shifted to mediated and electronic means from the traditional face-to-face, and some of the consequences of this will be raised.

Second, Norihito Taniguchi will deal with intercultural communication, discussing the effectiveness of international student exchange before and during the pandemic, focusing on the personal benefits derived from such. Online exchange via VSE (Virtual Student Exchange) and COIL (collaborative online

international learning) will be scrutinized from the perspective of intercultural communication and its anticipated effects, compared to traditional onsite learning.

Third, Anqi Hu will look at intergroup communication, in particular contact theories, which originated from Allport's (1954) classical Contact Hypothesis. She will discuss the effectiveness of virtual contact methods, including imagined, extended, electronic, and vicarious contact, as compared to the traditional direct, face-to-face contact in intergroup relations.

Fourth, Lina Wang looks at communication apprehension, and how electronic communication can mitigate, or exacerbate anxiety. In particular, the limited channels (nonverbal especially) in electronically mediated communication may help some people overcome their apprehension, while some may feel uncomfortable in expressing their social presence amongst an online crowd.

Fifth, Xuechen Hu will present her research on the health communication context, namely, her modified Theory of Planned Behavior model toward COVID-19 preventive behavior, in which she added the predictor variables of SNS involvement and media contact. She will also discuss the viability of alternate health communication theories to cater to the post-pandemic state.

Finally, Xingjian Gao, who studies mediated communication, will explain how self-disclosure in online and offline situation affect Chinese students in Japan' life satisfaction. He will refer to the social information processing theory, social presence theory, hyperpersonal theory and affordances of SNS while comparing the effect of medium of self-disclosure for Chinese students in different sojourning period.

コミュニケーション教育の新しい潮流 —日米のスピーチ・議論教育の現状を踏まえて—

司会： 小西 卓三（昭和女子大学）

発表者：川野 優希（立教大学大学院）

発表者：伊藤 萌紅（メリーランド大学大学院）

コメンテーター：松本 茂（東京国際大学）

コメンテーター：田島 慎朗（神田外語大学）

本パネルは、コミュニケーション学の中で基礎的コミュニケーション教育に位置付けられるスピーチや議論とディベートの実践について、日米の状況を踏まえて萌芽的アイデアを検討する。第一発表者の川野は、インタビューや教科書分析を踏まえ、日本のスピーチ/プレゼンテーション教育の問題点や課題を整理する。第二発表者の伊藤は、現在の米国の議論・ディベート教育が指定制の普遍性の検討を踏まえ、「反コロニアルな倫理的討議」を教える手順を紹介する。本パネルは、発表原稿に事前に目を通したコメンテーターが、内容にコメントする発表を行い、その後に参加者の議論を行う。第一発表は日本語で、第二発表は英語で行われ、田島、松本がそれぞれコメントを行う。

日本の大学におけるスピーチ/プレゼンテーション教育の現状と課題について

—コミュニケーション研究者へのインタビュー調査および教科書分析を通して—

立教大学異文化コミュニケーション研究科 博士前期課程1年

川野優希

社会の様々な場面でコミュニケーション力を試され、人前で話す機会が増えるに伴い、日本の教育機関においてもプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の育成が求められている。しかしながら、高等教育におけるコミュニケーション教育機関の現状を眺めると、アメリカの大半の大学がコミュニケーション基礎科目を必修科目としており、多くの場合パブリックスピーキングが基礎科目群の中核を占めているのに対し、国内でスピーチあるいはプレゼンテーションを必修科目としている大学は数少ない。加えて、レトリック理論をはじめとするスピーチ教育の理論的基盤や指導法に精通していない教員により授業が行われるなど、日本の大学におけるスピーチ/プレゼンテーション教育は質量の両面で多くの問題を抱えているが、教育の現状と課題を論じた先行研究は数少ない。そこで本調査では、日米両国においてスピーチ教育に携わった経験のある計13名へのコミュニケーション研究者のインタビューとスピーチ/プレゼンテーション教

育の共通点や相違点を明らかにし、比較から見えてくる日本のスピーチ/プレゼンテーション教育の現状と課題を整理することを目的とする。本研究を通して、日本の大学における従来のスピーチ/プレゼンテーション教育の在り方を再検討し、スピーチ/プレゼンテーション教育が今後の日本社会に果たしうる役割や可能性を見出す一助にしたい。

**Toward Anticolonial Ethical Argumentation:
Decentering Western Thought Through Interdependent Networks**

Megu Itoh

University of Maryland, USA

The field of Communication has long acknowledged the need to decenter western theory and norms, a need that has recently been taken up in the *Quarterly Journal of Speech*'s forum on #RhetoricSoWhite. However, scholars have only begun to discuss what this means for argumentation and debate. This project offers a pedagogical approach rooted in anticoloniality, or the effort to “challenge processes of universalization as method, as rhetorical practice, and as ontology,” to equip students with tools to navigate an increasingly globalized and digitized world (deTar 191). By foregrounding argumentation as a “human activity” (Tindale 70) that reveals the “fundamental interdependence” (Makau and Marty 11) of human relationships, I foster anticolonial praxis that delinks argumentation from persuasion and promotes seeking to understand across difference.

This paper locates dominant norms of argumentation within western colonial influence and advances a restorative model of anticolonial ethical argumentation. The force of colonial oppression is observed in the dominance of rationality, reason, and logical thinking in argumentation and in the suppression of non-western perspectives (Tindale 174). Thus, as Tindale has recently argued, an approach that recognizes argumentation as engagement between “human agents and their diverse commitments” (171) and that reflects the argumentative truths, reasons, and practices of various perspectives is needed.

To answer this call in pedagogical contexts, I argue for teaching “anticolonial ethical argumentation,” which asks students to consider humans agents as part of interdependent networks. This paper discusses activities and assignments designed to: (a) unsettle positionality and privilege, (b) maintain difference while understanding across difference, and (c) advocate for alternate perspectives. In questioning the norms of written and verbal persuasive, my aim is to provide a model of argumentation that decenters western colonial influence and prioritizes ethical engagement.

引用文献

deTar, Matthew. "Why 'Anticolonial' International Rhetorical Studies?," *Rhetoric & Public Affairs* 24, 1-2 (2021), pp. 191-206.

Makau, Josina M. and Debian L. Marty. "Critical Thinking." *Cooperative Argumentation: A Model for Deliberative Community*. Waveland Press, 2001, pp. 7-43.

Tindale, Christopher W. *The Anthropology of Argument: Cultural Foundations of Rhetoric and Reason*. Routledge, 2021.

The Role of Social Functions of Gratitude in the Development of Self-Esteem, Social Anxiety, and Depression

Ayano Yamaguchi (Rikkyo University)

Although the majority of religions highlight the social functions of gratitude as a fundamental virtue, it has been overshadowed recently by other constructs within the field of psychology. With the social functions of gratitude receiving increased scholarly attention with the advent of positive psychology, scholars have made major strides in demonstrating that gratitude is associated with enhanced well-being. Gratitude may actually serve as a buffer against maladaptive psychological functioning, such as depression (Brown & Ryan, 2003; Brown, Ryan, & Cresswell, 2007). However, an open question remains: “How does the relationship between the social functions of gratitude and depression, which is mediated by self-esteem and social anxiety, vary across cultures?” Examining the similarities and differences in cultural values that underlie the experience of gratitude and its relationship with depression may help cultivate increased sensitivity toward diverse emotional experiences and expressions of depression. The effects of behavior, cognition, and emotion, such as gratitude, on depression are guided by cultural values, where social and contextual opportunities or constraints influence the strength and direction of the association. With regard to emotions, social and contextual factors influence the desirability of emotions, such as gratitude, the manner of expressing emotions, and the (perceived) appropriateness of such expressions.

The importance of the social functions of gratitude as a positive trait worth cultivating has been accepted throughout history and around the world. Although gratitude may be a favorable characteristic that transcends cultural boundaries and holds long-lasting psychological benefits, this assumption lacks systematic testing using participants from diverse cultural backgrounds. In fact, previous cross-cultural research on gratitude focused almost solely on differences in the development and expression of gratitude and its relationship with depression in the western context (Lambert & Fincham, 2011; Williams & Bartlett, 2015).

The majority of studies that examine the relationship between the social functions of gratitude and depression across cultures highlight the expression of gratitude (Pishghadam & Zarei, 2011). This stream of literature demonstrated that positive emotional states were correlated with gratitude (verbal and facial) and prosocial behaviors among students from Thailand and Japan. However, a positive correlation between

feelings of indebtedness and increased prosocial motivation was observed only in male Japanese students (Naito, Wangwan, & Tani, 2005). It seems that scholarly focus on the expression of gratitude may have led to the current lack of research on the association between the social functions of gratitude (as opposed to the expression of gratitude) and other psychological disorders, such as depression.

Along with recent developments in the field of positive psychology, significant progress was noted in understanding the biological underpinnings of the social functions, psychological benefits, and methods of cultivating feelings of gratitude in daily life. Recent findings from cross-cultural studies revealed that gratitude is associated with four measures of life satisfaction in Japan and the United States (Robustelli & Whisman, 2018). Although gratitude seems to be correlated to enhanced well-being and may be linked to various interpersonal and mental health outcomes, such as depression, these associations lack a systematic or comprehensive comparison across cultures. As a result, the social functions of gratitude in the context of depression across cultures are not well established. To address these research gaps, this study examines the association between the social functions of gratitude and several domains of health and well-being, such as depression, using data from the United States and Japan, which represent contrasting cultural values (e.g., individualism and collectivism, respectively). Congruence in the patterns among variables would verify that the results are not specific to a particular culture. To our knowledge, an empirical investigation into the cross-cultural framework of gratitude in relation to various constructs associated with positive and negative psychological functions, such as depression, is lacking. Thus, elucidating the nature of gratitude in diverse cultural contexts may point out similarities and differences in the expressions of and human emotional experiences with depression.

References

- Brown, K. W., & Ryan, R. M. (2003). The benefits of being present: Mindfulness and its role in psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(4), 822–848.
- Brown, K.W., Ryan, R.M., & Creswell, J.D. (2007). Mindfulness: Theoretical foundations and evidence for salutary effects. *Psychological Inquiry*, 18: 211–237.
- Lambert, N. M., & Fincham, F. D. (2011). Expressing gratitude to a partner leads to more relationship maintenance behavior. *Emotion*, 11(1), 52–60.
- Naito, T., Wangwan, J., & Tani, M. (2005). Gratitude in University Students in Japan and Thailand. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 36(2), 247–263.
- Pishghadam, R., & Zarei, S. (2011). Expressions of Gratitude: A Case of EFL Learners.

Review of European Studies, 3 (2), 140-149.

Robustelli, B. L., & Whisman, M. A. (2018). Gratitude and life satisfaction in the United States and Japan. *Journal of Happiness Studies: An Interdisciplinary Forum on Subjective Well-Being*, 19(1), 41–55.

Williams, L. A., & Bartlett, M. Y. (2015). Warm thanks: Gratitude expression facilitates social affiliation in new relationships via perceived warmth. *Emotion*, 15(1), 1–5.

対面からオンラインへの移行に伴う伝達手法の使用に関する比較実験 —送り手の自己評価と受け手による評価についての考察—

八代 華代子（慶應義塾大学大学院）

1. はじめに

2020年春、COVID-19の急速な拡大により、世界中の教育機関や企業のコミュニケーションは、対面からオンラインへの急な移行を余儀なくされた。それを機に、対面とオンラインそれぞれの役割を探るため、対比する研究が必要とされている（泰松・石黒・大村 2021）。そこで、本研究の目的は、従来の（対面）の伝達手法に関する対面とオンラインの比較実験を行い、送り手と受け手の評価から伝達手法の使用に違いがあるかを明らかにすることである。これにより、対面とオンラインそれぞれの伝達手法の有効な役割を見出し、より円滑なコミュニケーションを実現することができると思う。

2. 先行研究と新規性

対面とオンラインでの伝達手法を比較した研究は多い。藤木（2020）は、印象的なスピーチに必要な要素として「音声」「表情」などを導出したが、これは受け手からの評価のみであり、送り手の自己評価には言及していない。その点で本研究と違いがある。また、宮内・遠藤（2021）は、会議での意思疎通について音声を使って比較しているが、他の伝達手法については述べていない点で本研究と違いがある。また、Miller（2020）は、対面とオンラインにおける非言語情報の明瞭さの違いを考察しているが、伝達手法の使用の違いについての考察はない。従って、本研究の新規性は、対面で使っていた伝達手法が、オンラインになっても果たして使えているのか、について送り手と受け手双方から評価することである。

3. 実験方法

2020年6月、社会人50名に、提案のプレゼンテーションの中で今まで使用していた伝達手法についてアンケートを実施後、オープンコーディングにより送り手が自己評価できる10項目と、受け手が評価できる15項目を導出し、実験の評価項目とした。提案のプレゼンテーションとする理由は、提案を通す目的の手法は能動的であるため、本研究に適していると考えたからである。実験参加者は、送り手が31名、受け手は対面とオンライン各31名（いずれも社会人）。対面では、送り手は立ち、受け手は座るという一般的な対面プレゼンテーションシーンの再現と1.5mの距離を保つことを指示したのち、送り手が準備したスライド3枚を使った3分間のプレゼン

ンテーションを1対1で行う。1分間の質疑応答の後、送り手と受け手がアンケートに回答。後日、同一の送り手が違う受け手に対して、スライドの映写タイミングと内容を対面と同じにしてオンラインで実施。1分間の質疑応答後、送り手と受け手がアンケートに回答する。受け手を別の人にする理由は、同じ提案とアンケートを2回受けることによる影響回避のためであり、対面とオンラインの実験日を別にしたのは、送り手の伝達手法への慣れを考慮するためである。尚、送り手には、伝達手法に関する比較実験とだけ伝え、受け手には、内容より送り手を使用する伝達手法に注目するよう伝えた。評価は順序尺度で、各手法が使えていたかの印象について「とてもそう思わない」「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらでもない」「どちらかと言えばそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」で、低→高の順に7段階とした。実験は、以下、2つの仮説を立てて実施する。

- a.伝達手法の使用についての送り手の自己評価は、対面とオンラインに違いがない
- b.送り手の伝達手法の使用についての受け手による評価は、対面とオンラインに違いがない

4. 結果

送り手の有効回答数 24 に対し、対応のある t 検定、受け手の有効回答数 48 に対し、対応のない t 検定で分析を行った。その結果、送り手は 10 項目中「顔の表情は豊かだったか」に有意差が認められ、平均値から、対面よりもオンラインの方が表情を豊かにできたことが示された。よって仮説 a は棄却され、伝達手法の使用についての送り手の自己評価は、対面とオンラインに違いがあることが明らかになった。一方、受け手は、15 項目中「スライドは見やすかったか」「聴きやすい声で滑らかな話し方だったか」「身だしなみに気を付けていたか」「(意図的に) 間を空けることは出来ていたか」「聴き手に合わせて話す速さやトーンを変えていたか」「聴き手の理解に合わせた言葉選びが出来ていたか」「聴き手の表情を伺って、長さや内容を調整しながら話せていたか」「五感に訴えることは出来ていたか」に有意差が認められ、8 項目全ての平均値から、対面よりもオンラインの方が評価の高いことが明らかになった。よって、仮説 b も棄却され、送り手の伝達手法の使用についての受け手による評価は、対面とオンラインに違いがあることがわかった。

5. 考察

対面とオンラインでは、送り手は、顔の表情という視覚に訴える伝達手法の使用に違いを感じている一方、受け手は、聴覚に訴えられた伝達手法の使用にも多くの違いを感じていることが示唆された。そして、送り手と受け手いずれも、対面よりオンラインの優位性が示唆された。これは、これからも続くオンラインコミュニケーションにおいて、さらに有効に機能する伝達手法の

研究、開発の必要性を示唆する結果となった。

6. おわりに

本研究の結果から、伝達手法の使用について、対面とオンラインでは異なるだけでなく、オンラインの方が使用される伝達手法があることが示唆された。特に、受け手への聴覚を通じた伝達手法の有用性は、遠隔授業やリモートワークでの円滑なコミュニケーションに大事な役割を果たす可能性が示唆された。一方、伝達手法には性差があるため (Hall & Gunnery 2013)、今後は、送り手と受け手の属性を考慮する必要がある。また順序効果も今後の課題である。発表では、事前の評価項目抽出の手順と参加者のヒアリングについても報告する。

引用文献

泰松範行, 石黒順子, and 大村恵子. "新型コロナ (COVID-19) 禍後の新大学生活をデザインする
必要性: オンライン授業に関する考察を踏まえて." *東洋学園大学紀要* 29 (2021): 194-209.

藤木美奈子. "印象に残るスピーチの要素: 対面とオンラインとの比較から." *桜美林大学研究紀
要. 人文学研究* 1 (2021): 114-126.

宮内佑実, and 遠藤正之. "オンライン会議とオフライン会議の意思疎通の比較." *経営情報学会
全国研究発表大会要旨集 2020 年全国研究発表大会*. 一般社団法人 経営情報学会, 2021.

Miller, Lisa. "Remote Supervision in Primary Care during the Covid-19 pandemic-the "new
normal"?" *Education for Primary Care* 31.6 (2020): 332-336.

Hall, J. A., & Gunnery, S. D. (2013): *Gender differences in nonverbal communication*. In J. A. Hall & M. L. Knapp (Eds.), *Handbooks of communication science. Nonverbal communication* (p. 639–669). De Gruyter Mouton.

補足資料

表 1 送り手の評価結果 対応のある t 検定 (n=24)

評価項目	平均値	標準偏差	t値	有意確率 (両側)
スライドは見やすかったか	0.125	1.424	0.430	0.671
聴きやすい声で滑らかな話し方だったか	-0.125	1.777	-0.345	0.734
声に抑揚をつけていたか	-0.250	1.225	-1.000	0.328
身だしなみに気を付けていたか (意図的に) 間を空けることはできていたか	-0.542	1.978	-1.342	0.193
アイコンタクトはできていたか	0.001	1.956	1.983	0.059
身振り手振りはできていたか	0.000	1.719	1.306	0.204
顔の表情は豊かだったか	-0.001	1.225	-3.000	*0.006
姿勢に気を付けていたか	-0.001	1.865	-1.423	0.168
対話がスムーズにできたか	0.000	1.663	-1.105	0.281

*P値<0.05 有意水準

表 2 有意差のある項目の平均値の差

評価項目	形態	平均値	標準偏差
顔の表情は 豊かだったか	対面	3.96	1.488
	オンライン	4.71	1.459

表3 受け手の評価結果 対応のないt検定 (n=48)

評価項目 (15項目)	等分散性のための Levene の検定				2つの母平均の差の検定				
	等分散	F値	確率	t値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	標準差	区間
スライドは見やすかったか	仮定する	11.866	*0.001	-2.746	46	0.009	-1.125	0.410	-1.950 -0.300
	仮定しない			-2.746	36.462	*0.009	-1.125	0.410	-1.955 -0.295
聴きやすい声で滑らかな話し方だったか	仮定する	2.221	0.143	-2.417	46	*0.02	-0.750	0.310	-1.375 -0.125
	仮定しない			-2.417	39.013	0.020	-0.750	0.310	-1.378 -0.122
声に抑揚をつけていたか	仮定する	3.420	0.071	-1.891	46	0.066	-0.667	0.352	-1.376 0.043
	仮定しない			-1.891	40.731	0.066	-0.667	0.352	-1.379 0.045
身だしなみに気を付けていたか	仮定する	14.458	*0.000	-2.677	46	0.010	-1.208	0.451	-2.117 -0.300
	仮定しない			-2.677	31.719	*0.012	-1.208	0.451	-2.128 -0.289
(意図的に)間を空けることはできていたか	仮定する	15.862	*0.000	-3.761	46	0.000	-1.583	0.421	-2.431 -0.736
	仮定しない			-3.761	34.393	*0.001	-1.583	0.421	-2.439 -0.728
アイコンタクトはできていたか	仮定する	0.623	0.434	-0.862	46	0.393	-0.417	0.483	-1.389 0.566
	仮定しない			-0.862	45.022	0.393	-0.417	0.483	-1.390 0.557
身振り手振りはできていたか	仮定する	5.817	*0.020	-0.095	46	0.925	-0.042	0.439	-0.926 0.842
	仮定しない			-0.095	40.992	0.925	-0.042	0.439	-0.929 0.845
顔の表情は豊かだったか	仮定する	1.021	0.318	-1.617	46	0.113	-0.708	0.438	-1.590 0.174
	仮定しない			-1.617	43.380	0.113	-0.708	0.438	-1.592 0.175
姿勢に気を付けていたか	仮定する	5.246	*0.027	-0.681	45	0.499	-0.292	0.428	-1.154 0.571
	仮定しない			-0.688	37.430	0.496	-0.292	0.424	-1.150 0.567
受け手に合わせて話す速さやトーンを変えていたか	仮定する	2.212	0.144	-2.784	46	*0.008	-1.042	0.374	-1.795 -0.288
	仮定しない			-2.784	42.370	0.008	-1.042	0.374	-1.797 -0.287
受け手の理解に合わせた言葉選びが出来ていたか	仮定する	10.607	*0.002	-3.301	46	0.002	-1.250	0.379	-2.012 -0.488
	仮定しない			-3.301	33.447	*0.002	-1.250	0.379	-2.020 -0.480
受け手の表情を伺って、長さや内容を調整しながら	仮定する	2.060	0.158	-4.469	46	*0.000	-1.833	0.410	-2.659 -1.007
	仮定しない			-4.469	40.848	0.000	-1.833	0.410	-2.662 -1.005
五感に訴えることは出来ていたか	仮定する	3.328	0.075	-4.522	46	*0.000	-1.917	0.424	-2.770 -1.063
	仮定しない			-4.522	42.715	0.000	-1.917	0.424	-2.772 -1.062
熱意が伝わっていたか	仮定する	6.488	*0.014	-1.916	46	0.062	-0.708	0.370	-1.453 0.036
	仮定しない			-1.916	35.301	0.064	-0.708	0.370	-1.459 0.042
対話がスムーズにできたか	仮定する	0.072	0.790	-1.630	46	0.110	-0.625	0.383	-1.397 0.147
	仮定しない			-1.630	46.000	0.110	-0.625	0.383	-1.397 0.147

*F値・P値<0.05 有意水準

表4 有意差のある項目の平均値の差

評価項目	形態	平均値	標準偏差
スライドは見やすかったか	対面	5.00	1.745
	オンライン	6.13	0.992
聴きやすい声で滑らかな話し方だったか	対面	5.58	1.283
	オンライン	6.33	0.816
身だしなみに気を付けていたか	対面	4.54	2.021
	オンライン	5.75	0.897
(意図的に)間を空けることはできていたか	対面	4.17	1.834
	オンライン	5.75	0.944
受け手に合わせて話す速さやトーンを変えていたか	対面	4.79	1.474
	オンライン	5.83	1.09
受け手の理解に合わせた言葉選びが出来ていたか	対面	4.92	1.666
	オンライン	6.17	0.816
受け手の表情を伺って、長さや内容を調整しながら	対面	3.96	1.654
	オンライン	5.79	1.141
五感に訴えることは出来ていたか	対面	3.67	1.659
	オンライン	5.58	1.248

*

係留寸描法を用いた回答バイアスの検出および補正の試み

田崎 勝也（青山学院大学）

1. はじめに

これまでに見出されてきたコミュニケーション理論の多くはその理論的・蓋然的な根拠を質問紙調査によって得た数量的データに委ねてきた。他方で質問紙調査には調査の妥当性を脅かす数多くのバイアスが存在する。本研究はその中でも最も根源的かつ重要と思われる「尺度の不定性」(arbitrariness)の問題に着目し、米ハーバード大学の教授 Gary King 氏によって見出された「係留寸描法」(Anchoring Vignettes、以下 AV)を用いてバイアスの検出・補正を試みる (King, Murray, Salomon, & Tandon, 2004)。

尺度の不定性は、評定尺度法 (i.e., リカート尺度) を用いた測定で、評価基準と構成概念の対応関係が個人や集団により異なる問題を考える (村山、2012)。特異項目機能やレスポンス・スタイルなどの回答バイアスは尺度の不定性との連関が考えられている。そして AV 法とは、仮想の人物や事象について「客観的」な寸描評価との相対的な位置関係から、自己評価基準の個人差を補正し尺度の不定性を解決しようとする試みである。

2. 方法

本研究は青山学院大学「人を対象とする研究に関する倫理審査」を受け承認された (認定番号: 青 19-33)。2021 年 11 月に、都内私立大学に通う大学生を対象に授業内質問紙調査を行い 215 名から回答を得た。回答者の男女比は男性が 77 名 (36%)、女性が 137 名 (64%)、平均年齢は 19.72 歳 (SD=1.31) となった。調査の所要時間は約 20 分だった。

質問紙は JSPS 科研費研究「Web 調査データに潜む反応バイアスの検出とその補正」

(19K03209) のために作成されたもので、レスポンス・スタイルや無気力回答などの回答バイアスを特定するためにデザインされている。今回分析に使用したデータは比較検討のために紙面調査により収集した学生データの一部で、AV に関する測定には欧州国際比較調査で用いられた健康状態に関する自己評価項目と 3 つの AV 項目を使用した。各項目は逆翻訳法によって翻訳の等価性を確認し、痛みに対する評価には 1=「痛みなし」、2=「弱い痛み」、3=「中くらいの痛み」、4=「強い痛み」、5=「極めて強い痛み」の 5 件法を用いた。

3. 結果と考察

AV 項目には 3 段階の痛みのシナリオが設定されており (表 1)、 $AV3 > AV2 > AV1$ と示されるはずの順位に対して、同順位や逆順位などのイレギュラー回答への対処が必要となる。まずイレギュラー回答の発生頻度を確認したところ、有効回答数 214 のうち、同順位は 88 件 (40.9%)、逆順位は 45 件 (20.9%) あった。イレギュラー回答がやや多いことから、強度中位の AV2 を分析から外して再度頻度を確認したところ、同順位は 29 件 (13.5%)、逆順位は 16 件 (7.4%) と減少したため、今回は AV3 と AV1 のみを分析に使用した。

King (2020) により提案されたノンパラメトリック法を基に回答者自身の痛みの程度の再スケールを試みた。AV 項目評価との相対的な位置関係から、例えば、 $SELF < AV1 < AV3$ なら 1、 $SELF = AV1 < AV3$ なら 2、 $AV1 < SELF < AV3$ なら 3、 $AV1 < SELF = AV3$ なら 4、 $AV1 < AV3 < SELF$ なら 5 のように再スケールが可能になる。イレギュラー回答は、複数個の再スケール得点が考えられるが、Kyllonen と Bertling (2014) に従い、最小修正値を再スケール得点とした。

1 サンプルの t 検定の結果、自己評価得点の平均値 1.95 点

(SD=1.03) は再スケール得点の平均

値 1.67 点 (SD=0.93) より有意に高かった ($t(212)=-4.45, p<.001, d=.31$)。自己評価、再スケール得点ともに男女差は示されなかった。今回の調査ではデータの制限から特異項目機能との関連性は検討できず、こうした回答の歪みが回答者の社会文化的背景とどう関連するかは不明だが、尺度の不定性がバイアスとなりリカート尺度での評価を歪めている可能性は示された。また、再スケール得点による質問内容の異なる尺度への補正が検討されていることから (Kyllonen & Bertling, 2014)、質問紙に含まれていた幸福感尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) 5 項目を用いて検討した。尺度得点を作成し男女差を検見したところ、女性 ($M=3.44, SD=0.95$) は男性 ($M=3.06, SD=0.97$) より幸福感が高かった ($t(206)=-2.77, p=.003$)。そこで痛みの自己評価得点と

表 1. 自己評価項目と AV 項目

自己評価項目
SELF. 全体的に見て、直近の 30 日で、あなたは体にどの程度の痛みを感じていますか？
AV 項目
AV1 (LOW). ポールは月に一度程度頭痛がある。ただクスリを飲めば痛みは治まり、通常の生活を送ることができる。全体的に見て、直近の 30 日で、ポールは体にどの程度の痛みを感じていますか？
AV2 (MEDIUM). ヘンリは工作中、右腕から右手首に渡り痛みを覚えた。夜には痛みは和らぐものの、コンピュータを使った業務はできない状態にある。全体的に見て、直近の 30 日で、ヘンリは体にどの程度の痛みを感じていますか？
AV3 (HIGH). チャールズは膝、肘、手首および指に痛みがあり、ほとんど一日中痛みがある。クスリは効くものの、動き回ったり、ものにつかまったり、持ち上げたりするときは違和感がある。全体的に見て、直近の 30 日で、チャールズは体にどの程度の痛みを感じていますか？

再スケール得点との差分を共変量とした共分散分析を行った。差分と性別の交互作用項は非有意だったことから ($F(1, 203)=0.53, n.s.$)、差分を共変量として補正を行った。性別の主効果は依然として有意で ($F(1, 203)=10.63, p=.001$)、推定周辺平均ではわずかだが性差が鮮明化した (男性 : $M=3.02, SE=0.11$; 女性 : $M=3.45, SE=0.08$)。

以上 AV 法により尺度の不定性に関連するバイアスの修正可能性が示された。今後は AV 項目の妥当性の検討、異文化データでの検証などを通して AV 法の精緻化を進めたい。

引用文献

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). Satisfaction with Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- King, G. (2020, August 17). 19. Anchoring Vignettes. [Video file].
<https://www.youtube.com/watch?v=8xUQNJAawZS8>
- King, G., Murray, C.J.L., Salomon, J.A., & Tandon, A. (2004). Enhancing the validity and cross-cultural comparability of measurement in survey research. *American Political Science Review*, 98, 191-207.
- Kyllonen, P.C., & Bertling, J.J. (2014). Innovative questionnaire assessment methods to increase cross-country comparability. In L. Rutkowski, M. von Davier, & D. Rutkowski (Eds.), *Handbook of international large-scale assessment: Background, technical issues, and methods of data analysis* (pp.277-286). Boca Raton, FL: CRC press.
- 村上航 (2012). 妥当性 : 概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察. *教育心理学年報*, 51, 118-130.

The Politics of Trans Visibility in Japanese Film

—A Feminist Film Analysis of *Close-Knit* (2017) and *Midnight Swan* (2020)—

Naoki Kambe (Rikkyo University)

1. Introduction

Transgender people or “those who move away from the gender they were assigned at birth” (Attwood 10) have always existed in our society. Despite their existence, the representation of transgender people tended to fall into two categories for a long time: comic or pathological (Bell-Metereau 15). In Japan, male-to-female (MtF) cross-dressing transgender performance known as “new-half” (Mr. Lady) has been popular and categorized as a comic genre in the entertainment business. Although these popular categories still exist in the 21st century, the public begins to witness more and more diverse transgender characters in the media. As Reina Gossett, Eric Stanley, and Johanna Burton argue, this change or increasing trans visibility in the media, however, does not function as a remedy or “teaching tool” for broader acute social crises (xv), nor does it guarantee social acceptance of transgender people. In turn, we fall into, what they call, “the trap of the visual” (xv) or a politics of visibility “where being seen can gesture misrecognition” (Feldman 2). In this paper, I will locate the discourses that construct misrecognition of transgender people through analyzing some recent Japanese mainstream films whose stories center on/around a transwoman and her life and “family.” Through this feminist film analysis, I will reveal the politics of visibility which “fixes just as it names; it dismisses some as it champions others; it distracts; it normalises; it fossilises” (Bradbury-Rance 3).

2. Analysis

First, I will analyze the film *Karera ga Honki de Amu Toki wa* (*Close-Knit*) (2017) directed by Naoko Ogigami. This is a story about a girl (Tomo), who has been neglected by her mother, begins to live with her uncle (Makio) and an MtF transwoman (Rinko). Through spending time with Makio and Rinko, Tomo discovers her “family” who truly loves her. One of the characteristics of trans representation is Rinko’s embodiment of femininity *and* masculinity through which her trans body has been marked and stereotyped. Another characteristic is the representation of Rinko’s motherhood which plays a key role to build a “daughter-mother” relationship with Tomo and, in turn, emphasizes a heteronormative and patriarchal structure of family and woman’s gender roles in Japan.

Another film to be analyzed is *Midnight Swan* (2020) directed by Eiji Uchida. This is a story about

Nagisa, an MtF transwoman working as a nightclub dancer, who begins to live with a middle school girl Ichika being neglected by her mother before meeting Nagisa. Similar to that of *Close-Knit*, Nagisa's motherhood and a "daughter-mother" relationship with Ichika are noticeable through which she seems to find something normal in her life for a brief moment. Another characteristic is Nagisa's miserable and unfortunate life as a transwoman who always suffers from mental and physical instability and her loneliness throughout her life.

These two films are different from the previous media productions which fell into comic or pathological representations of transgender people. This does not mean that they are used as a remedy or teaching tool to help people accept transgender people. Rather, these films not only emphasize and strengthen stereotypical images of transwoman and heteronormativity but also glorify the patriarchal structure of family and woman's gender roles in Japan by idealizing a normative family and a daughter-mother relationship.

Work Cited

Attwood, Feona. *Sex Media*. Medford: Polity, 2018.

Bell-Metereau, Rebecca. *Transgender Cinema*. New Brunswick: Rutgers UP, 2019.

Bradbury-Rance, Clara. *Lesbian Cinema after Queer Theory*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2020.

Feldman, Zeena. "Introduction: Why Visibility Matters." *Art and the Politics of Visibility*, edited by Zeena Feldman, pp. 1-20. London: I. B. Tauris, 2017.

Gossett, Reina, Eric A. Stanley, and Johanna Burton. "Known Unknown: An Introduction to Trap Door." *Trap Door: Trans Cultural Production and the Politics of Visibility*, edited by Reina Gossett, Eric A. Stanley, and Johanna Burton, pp. xv-xxvi. Cambridge: The MIT Press, 2017.

Karera ga Honki de Amu Toki wa (Close-Knit). Directed by Naoko Ogigami, Suurkiitos, 2017.

Midnight Swan. Directed by Eiji Uchida, Kino Films, 2020.

アメリカ社会におけるマスク・フォビアと東アジア人の他者化 —米国在住日本人女性のコロナ禍の体験の語り—

船山 和泉 (Sarah Lawrence College)

1. はじめに—コロナ・パンデミック と黄禍論の再燃

コロナ禍中のアメリカ社会ではアジア系住民を対象としたヘイト・クライム、つまりは憎悪犯罪が多発・急増・苛烈化した。この背景には、「黄禍論」とも称されるアメリカ社会（を含む欧米諸国）で長い歴史を持つアジア系住民に対する根強い差別がある。加えて、トランプ前アメリカ大統領がコロナ感染拡大初期時に「コロナ・ウイルス」や「COVID-19」ではなくあえて「チャイナ・ウイルス」という言葉を多用し、コロナ禍の責任が中国にあると強調したことは、アメリカ社会において中国系住民だけでなくアジア系住民全体への差別を助長することに大きく寄与した。

本研究は米国在住の日本人女性 30 人に対して、トランプ政権とその政権下で起きたコロナ禍の体験について、2020 年に行ったインタビューをデータとした「語り」の考察を核とするエスノグラフィーの一部をなすものである。本研究は特に、インタビュー協力者たちが感染拡大初期の頃に体験した「マスク着用」についての不安や恐怖についての語りを取り上げ考察する。

コロナ感染拡大によって我々の生命や健康そして生活は文字通り危機に晒された。だが米国ニューヨーク州在住の筆者にとっては、感染そのものに対する不安よりも、本来は感染防止の為のはずのマスクを着用することにより、人々の目を引き攻撃的な言動の対象となる不安の方がよほど大きかった。本研究は、コロナ危機によりアメリカ社会における黄禍論が再燃し、そのいわばシンボルともなった「マスク」が、人間を他者化し人間性を剥奪することをより容易とする非言語コミュニケーションとなってしまった社会現象について論ずるものである。特に「東アジア人の外見」を持つ者としてのエスニシティの具現化が、「マスク」という“シンボル”によって如何に活性化されたかということについての体験について、「語り」を通して考察する。

2. マスク・フォビア—マスクのシンボル化とその体験—

Burgess と Horii (2012) が述べるように、日本では自分が病気の時に他の人に病気をうつさないようにするためだけでなく、花粉症の折などに自分の健康を守るためにもマスクをするという文化が既に成立していたためか、新型コロナ・ウイルスの流行初期から多くの人がマスクをつけていた。マスクはコロナ禍のシンボルとなり、「この厄災における政治、経済、日常生活、感情反応などのほとんどの議論の焦点にできるアイテムは他に見当たりそうにない」と平川は言う

(2020, p.55)。アメリカ社会においてもマスクがコロナ禍のシンボルとなったことは間違いないが、その過程と様相は日本とはかなり異なった。

日本でのそれはマスク着用人口とマスク着用時間の増加であり、自分の健康と社会の公衆衛生の維持と促進のためのものであるというマスクの持つ意味が大きく変わったわけではなく、マスク本来の基本的な機能や使う意味についての疑念は日本社会では生じにくい。一方、アメリカ社会においては、マスクは病気か、以下の S さんの言葉を借りれば「気狂い」の人間（だけ）がつけるものである、という社会通念が長らく存在した。このことは以下 S さんとのインタビューの抜粋からも窺える。

抜粋 1) S さん

コロナが始まった時、誰もマスクをしてない時にマスクをしてたら、あなたなんでマスクをするのみたいなことを言われましたね。スーパーでレジの人から、なんかマスクつけてるなんて気狂いみたいだな、みたいなことを。

さらにこのようなマスク着用に関する日本的な常識とアメリカ社会のそれとの齟齬が、葛藤を超えて恐怖につながった体験について、以下に紹介する R さんは語る。

抜粋 2) R さん

そうそうそう、マスクした女の子が殴られたとか、いるでしょ。だからマスクはしないでおこうとか。反対にね。あの頃は、怖くてマスクなんかできないよって、最初は思った。

マスクの着用に関して「気狂いみたいだ」と嫌味を言われるだけでなく、身体的な攻撃を受けるかもしれないという恐怖を感じる。そしてそれ故にマスクの着用を躊躇するという体験は、マスクに関する日本の社会通念からは想像し難いが、このような体験は本研究のインタビュー協力者の間で、程度の違いこそあれ、通底するものであった。

日本と同様に東アジア諸国ではマスク着用文化が元々根付いていたためコロナ感染拡大初期から人々のマスク姿が一般的となったが、米国でも、アメリカ市民であれ外国人であれ、東アジア地域にルーツを持つ人々の間では他の人たちに先んじてマスク姿が見られるようになった。しかし「気狂い」がマスク着用に対しての社会通念であるアメリカ社会において、そのことは“マスク・フォビア”すなわち“マスク嫌い”とでも呼べるような現象と結びついた。マスク姿は、Tchen と Yeats (2014)の言葉を使えば「標準的なアメリカ的自己」(=the normative American Self)

(p.5) と相反するものであるが故に、マスク姿の人間を他者化し人間性を剥奪することはより容易となる。さらに、コロナ感染拡大に対しての不安や恐怖を、「標準的なアメリカ人」とは違う

マスク姿の人間に投影することで、この問題は自分たちの問題ではなく“マスクをしている”（ゆえに標準的なアメリカ人とは違う）東アジア人の問題なのであると捉えることが容易となる。そしてマスク姿の東アジア人を排除・攻撃することは、コロナ感染拡大に対しての不安や恐怖を排除・攻撃することであるという論理が成立する。コロナ渦中のアメリカ社会で生きる東アジア人の外見を持つ人間にとって、マスクをすることは（場合によっては新型コロナ・ウイルス感染以上の）リスクだったのである。

3. おわりに-マスクの意味が変わっても-

アメリカ社会においてアジア人と感染症を結びつけた人種差別は長い歴史を持ち、折々に再燃してきたし、今後もまたそうであろう（廣部, 2020）。一方、2022年1月現在、およそ2年に及ぶコロナ禍を経て、アメリカ社会における「マスク」は全く違った意味を持つに至り、マスク着用（義務化）は裁判の争点となっている。マスク（着用の有無）は東アジア人（に対する差別）ではなくむしろ政治的信条と結びついたアメリカ社会の分断を表すシンボルの一つとなった。では再び世界がパンデミックに見舞われる時、「東アジア人の“外見”と結びついたマスク」以上に、“禍”を象徴するイメージをアメリカ社会は生み出し得るのだろうか。“東アジア人の外見そのもの”以外には、候補はないように思う。

引用文献

平川大作（2020）「新型コロナウイルス感染症と演劇」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』
71:51-61.

廣部泉（2020）『黄禍論一百年の系譜』講談社選書メチエ.

Burgess, A., and Horii, M. (2012). Risk, ritual and health responsabilisation: Japan's 'safey blanket' of surgical face mask-wearing, *Sociology of Health & Illness*, 34 (8), 1184–1198.

Tchen, J.K.W., and Yeats, D. (Eds). (2014). *Yellow peril!: An archive of anti-Asian fear*. Verso.

言説的關係性の対話的構築

—ラップ作品の動画コメント欄分析から見えてくること—

小坂 貴志 (神田外語大学)

出口 朋美 (近畿大学)

1 対話論におけるコメント欄分析

対話論において、Web サイトのフォーラムにおけるユーザー同士の対話的關係構築について研究がおこなわれている。Witteborn (2011) は、ウイグル・アメリカ協会の仮想フォーラムでやりとりされたメッセージを対話的に分析し、対話を阻害する要因として (1) ラベル化

(labeling)、(2) 真実語り (truth talk)、(3) 不信感 (distrust) の 3 つをあげ、対話的言説空間において生成された差異が対話を阻害する方向に向かわせていると結論付けた。本研究は、同研究に依拠し、YouTube 動画に寄せられたコメント欄を分析することで、ラップ・シーンにおける対話的關係性構築のプロセスを理解することを目的とする。

2 研究の方法・結果・考察

本研究にて分析の対象としたのは、日本人を両親に持ち、ドイツのデュッセルドルフで生まれ育ったラッパーの Blumio (本名は國吉史生) である。2005 年にドイツで「Meine Lieblingsrapper (僕のお気に入りのラッパー)」という曲でデビューし、話題になる (Real Sound テック編集部、2018)。その後、彼をさらに有名にしたのが YouTube で約 1780 万回 (2021 年 12 月 5 日現在) の再生数を誇る、2009 年に発表された Hey Mr. Nazi という曲があるが、現在、活動の拠点を日本に移し日本語でのラップの曲を多く発表している。Hey Mr. Nazi と同じ撮り方で、異なったメロディーと歌詞で作られた Hey Mr. Japan がある。

僕ドイツ生まれ ドイツ育ち

最初は思ったよ みんなとおいらは同じ

そしてやってきたよ初日 楽しみだよ幼稚園

でもみんなが僕のこと指で指してくるのはどうして?

髪が黒いって この目が細いって

2 個上のお姉ちゃんが言ってくれた「こっちへおいで」

僕と僕のお姉ちゃん アジア人は 2 人だけ

幼稚園つまんない だって辛いだけ

この曲は、幼稚園の登校初日に、姉と共に唯一のアジア人であったことで他の園児たちから指を指され、見た目について指摘されたというパーソナルヒストリーから始まっている。タイトルからしてこれは日本に住む日本人に向けられた曲であることが推測されるが、マジョリティーであるが故に人種差別に関して当事者意識を持つ経験が少ない者にとって、Blumio の経験は新鮮に聞こえるだろう。この曲のコメント欄に投稿された「海外で差別を受けた時に、その国では差別が無いって言ったのを思い出した。日本に戻って差別無いって自分も思った。それは自分が多勢に居るからなんだね。とても考えさせられる曲でした。」(どんちゃん, 2019) に、267 件のいいね! がつけられていることから想像できる。

Blumio のドイツ、または日本に対する他者的視点は、これらの動画を視聴した者からさまざま

なナラティブを引き出している。

自分は高一のペルーと日本のハーフです。 blumio さんのこの曲は本当に胸に響きました 自分も同じような経験があるからです だから blumio さんの気持ちがマジでマジで分かります でも今はみんな自分の見た目がどうであろうが自分の中身を見てくれるようになりました。(お友達わーさん)

自分は小学生の頃、中国人と日本人のミックスの同級生と喧嘩しました。 その時に「中国人のくせに！」と言ってしまったことがずっと心に残っています。本当に後悔しています。「何故、そんなこと言ってしまったのか。」 「今まで無意識にそんな思っていたのか。」 と自分が恐ろしくなりました。 ただ、そんな自分の事を許してくれた友人と叱ってくれた学校の先生には感謝しています。 その子は遠くへ引っ越してしまっただけで、今でも親友です。(中略)(ショートコントポッポ、2019年)

この動画のコメント欄に対して投稿されたコメントの多くは、単に Blumio やこの曲を素晴らしい！カッコいい！と賞賛する内容が中心となっているが、その中にぼつり、ぼつりと日本社会における外国人差別について自らの経験を書き綴っているものも投稿されている。 Blumio の語りかけに応答するように、視聴者は日本社会で経験した外国人差別(する方もされる方も)を語り、それらのナラティブがこのコメント欄を多声的な空間へと押し上げている。

3 おわりに

本研究では、YouTube のコメント欄に投稿されたコメント内容を分析することで、オーディエンスがどのような形で多声的・対話的にラップ作品との関係性を構築するかを考察した。ラップ作品の視聴により、自らの経験をより深く理解する機会となり、コメント欄が多声的な空間に変容する様子を伺い知ることができた。今回取り上げたラップ作品以外でも、特に差異と対話的關係性構築の關係性分析を深められるよう、今後の研究課題としたい。

引用文献

- Real Sound テック(2018)三四郎の ANN に楽曲投稿で話題 ドイツ出身ラッパー・Blumio (ブルーミオ) の経歴に迫る 2018.3.16 <https://realsound.jp/tech/2018/03/post-166259.html>
- Witteborn, S. (2021) Discursive grouping in a virtual forum: Dialogue, difference, and the “Intercultural.” *Journal of International and Intercultural Communication*, 4(2), 109-126.
- お友達わーさん (2020). 自分は高一のペルーと日本のハーフです。 b [Comment on the video “Blumio - Hey Mr. Japan ft. Kyte (Official Video)”] YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=06lLFSimvMA>
- ショートコントポッポ (2020). 自分は小学生の頃、中国人と日本人のミックス[Comment on the video “Blumio - Hey Mr. Japan ft. Kyte (Official Video)”] YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=06lLFSimvMA>
- どんちゃん (2020). 海外で差別を受けた時に、その国では差別は [Comment on the video “Blumio - Hey Mr. Japan ft. Kyte (Official Video)”] YouTube.

<https://www.youtube.com/watch?v=06lFSimvMA>

放送児童劇団の研究

—場所感の変容と維持の視点から—

王 令薇（京都大学大学院）

1. 研究背景と目的

本研究は、NHK 名古屋児童劇団（1948 年～）の歴史への考察を通して、放送局の児童劇団という特定の場所でどのような教育が期待・実行されたのかを検討するものである。

メイロウィッツ（1985=2003）は、ラジオ・テレビをはじめとした電子メディアが「場所感の喪失」（no sense of place）、つまり物理的場所と社会的「場所」の分離をもたらしたと論じている。この視点より、放送は、物理的場所をどのように越えられたのかを中心に議論・研究が行われてきた。それらに対し、本研究は、あえて教育を意図した対面コミュニケーションの場所が放送局によって設立・維持されているという現象に着目し、日本における放送文化の特徴を再考したい。

まずは限られた資料から日本における放送児童劇団の歴史を概観する。放送児童劇団とは、ラジオ・テレビのための児童演技者の提供を主な目標とする施設である。2022 年現在日本における放送児童劇団は、管見の限りでは、NHK が 1950 年頃に創設された東京、大阪、名古屋での 3 つしか存在しない¹。ただし、1950 年代において各地域放送局が放送子供会（放送児童劇団）を持つようになったトレンドがあったとも考えられる。また、NHK だけではなく、例えば中部日本放送（CBC）の児童劇団²が存在するように、民間放送も児童劇団を設立した。これらの児童劇団は、放送教育、特に学校放送番組に貢献していると言えよう。

当時の資料はほとんど残されていないので、放送児童劇団に関する研究は見られない³。放送史における言及も少ない。本稿で扱う NHK 名古屋児童劇団に関しては、NHK 名古屋放送局制作の長寿番組『中学生日記』と関わりを持ち続け、資料はある程度残っている。すでに同劇団の担当者が『NHK 名古屋児童劇団 70 周年』という記念誌にまとめているが、本研究では、上述した場所感の視点と周辺資料からこの児童劇団の歴史を浮き彫りにしたい。

本研究は、放送の子どもへの教育の一側面も明らかにできる。NHK 名古屋児童劇団の規定を見ると、少なくとも 1975 年までにはその目的が「団員相互の親睦と芸術的素養の養成をはかること」と変化し、1982 年からは「団員の演劇的素養の育成をはかり、放送番組の出演、発表会等でその成果を発揮させるように努め、併せて団員の人間形成に役立つこと」となっている。つまり、演劇・放送番組の出演の教育効果も期待されている。放送教育は多くの場合、視聴者と番組とのコミュニケーションを通じて行われている。児童劇団における教育はマイナーな存在であるためか、先行研究でほとんど言及されていない。以下、この対面コミュニケーションの教育効果に与えられた期待を考察し、研究の空白を埋めたい。

2. 分析方法

資料に関しては、『NHK 名古屋児童劇団 70 周年』『NHK 名古屋放送局 80 年のあゆみ』『戦後名古屋の演劇史 夢・時代とともに』などの二次資料と、NHK 名古屋児童劇団に携わった講師の経歴、現在講師を務めている方々への聞き取り調査を扱う。また、同劇団と日本の児童演劇、学校でのドラマ教育、NHK 東京・大阪児童劇団の取り組みとの関連も見たい。その際に、日本児童・青少年演劇劇団協同組合の資料、ホームページ掲載情報も扱う。

3. 考察

NHK 名古屋児童劇団は 1948 年に「名古屋放送子供会」という名前でスタートした。口演童話家の川口遼と、NHK の番組制作者やアナウンサーが当時 10 数人の劇団員を指導した。1954 年 4 月に、テレビ本放送の開始とともに、劇団員の放送に出る機会も急増し、とりわけ 1962 年以降『中学生日記』とその前身番組で劇団員は重要な役割を演じ続けた。

放送以外には「舞台」での活動、つまり「研究発表会」は 1966 年に始まった。劇団の指導者、NHK ディレクターと、名古屋放送劇団の俳優などが演出を担当した。彼らは、舞台公演を通じた劇団員の「子どもらしい想像力と独創力」（『NHK 名古屋児童劇団 70 周年』、pp.10）の向上を目指している。NHK 名古屋児童劇団は、プロな役者を育てる場所ではなく、人間形成をめざす場所とされている。その理由としては次の 2 つが指摘されている。

第一に、「学校とは関係のない充実した時間をここで過ごせる」（前掲書、pp. 53）という劇団の指導者の言葉のように、団員にとっての家と学校以外の〈サードプレイス〉となっている。第二に、劇団での教育は、コミュニケーション能力の勉強とされている。協力関係の構築、小学校から高校までの縦な関係の構築が重要視される。デジタル環境が増えるなか、演劇という「アナログな世界」（前掲書、pp.53）は一層必要と見なされてきた。子どものコミュニケーション能力の低下を心配してこの場を利用する保護者も現れている。

「場所感の喪失」をもたらした放送の内容制作を支えるために、児童劇団という対面コミュニケーションの教育機能を重要視する場所が創設され、またネット社会でコミュニケーション能力の勉強のための場所として依然必要とされることがわかる。これからは、この場所に与えられる意義を、同時代のメディアと児童演劇の状況とともに検討していきたい。

注釈

- 1 三浦貞子（1984）によれば、1940 年代にすでに JOJG 山形放送子供会が設立し、放送のための歌の練習を行っていた。子どもが放送に出演する歴史は戦前までさかのぼることもできよう。劇団だけではなく、児童合唱団・管弦楽団も存在する。
- 2 この児童劇団は 1950 年代から 1960 年代初頭まで存在したと考えられる。
- 3 成人の放送劇団に関する研究も少ない。飯塚恵理人（2015）の資料紹介は参考になる。

引用文献

- 飯塚恵理人（2015）「昭和三十年代「劇団 CBC」のラジオドラマ資料」『相山人間学研究』 10、pp.166-172。
- 三浦貞子（1984）「証言・黄金の日々山形放送子供会」『緑とせせらぎと桜並木のある街』山形市緑町北区創成六十周年記念刊行会、pp.17。
- Meyrowitz, J. (1985=2003). *No Sense of Place*. (安川一・高山啓子・上谷香陽訳『場所感の喪失・上』新曜社、pp.264-265.)

戦後「ぼやき漫才」と社会規範

—当時の視点／現在の視点からの分析—

埴 幸枝 (成城大学)

1. はじめに

笑いとはきわめて社会的な営為である。通常、笑いは「普通」でない事物に対して向けられる(ベルクソン, 1976)が、それが可能になるのは「普通」が何たるかを規定するための価値規範が存在するからである。その意味で笑いの分析は、それが置かれた当該社会の規範を読み解く一つの手がかりになる。笑いは様々な表現形式をとるが、そのなかでも漫才は、虚構性と現実性が入り組んだ、特有の様式をもつ。本研究では漫才における笑いの特性に留意しつつ、漫才の「語り」を社会的な観点から分析していく。具体的な分析題材として戦後日本における「ぼやき漫才」の代表的存在であった人生幸朗・生恵幸子の漫才を取り上げ、二つの視点——第一に当時の社会的文脈からそれを検討する視点、第二に現在の社会的文脈からそれを検討する視点——に依拠しながら、漫才と社会規範の関係を明らかにする。

2. 漫才の社会的機能

一般的に漫才とは、ボケとツッコミの関係を中心に、「特定のコードの共有(すなわち、そこでの支配的なコードが何たるか)を前提としたうえで、二つのコード(支配的なコードと、それとは相容れないコード)を反復しながら遂行されていくもの」(埴, 2019, pp.18-19)と捉えることができる。この意味で、漫才とはある種のメタコミュニケーションであるといえる。また、戦時下のモダン漫才が時局への批判力と公的イデオロギーの媒介という両義的なかたちで作用していた(米山, 2002)ことからわかるように、漫才には「規範に背きつつ、規範を強化する」という社会的機能が随伴することにも留意する必要がある。

3. 「ぼやき漫才」と戦後日本社会——当時の社会的文脈から

1960年代から1970年代を中心に人気を博した「ぼやき漫才」の一つに、人生幸朗・生恵幸子の夫婦漫才がある。この「ぼやき漫才」では、戦後に登場した新たな文化の流行(とりわけ、若い女性のファッションや振る舞いなど)が揶揄の対象とされる。ここに「高齢男性(=旧来の文化的コード)／若い女性(=新たな文化的コード)」の対立構造が示されているのは明らかだが、これが笑いに結びつく過程については二つの解釈可能性が浮上する。一見すると、これを見る観客は「ぼやき」に賛同し、「若い女性=新たな文化的コード」に笑いを向けるようにみえる。しかし、「ぼやき漫才」の観客(それをみて笑う人々)には「若者(の女性)」(「ぼやき」の矛先となる人々)もが含まれていたことを考えれば、じつはそこでの笑いが難癖をつける人生幸朗の振る舞い自体に向けられていた可能性もある。これらの視点を念頭に置き、漫才台本を社会背景との照合から分析することで、当時の社会が「旧来的な文化／新たな文化」のはざまに保持していた規範を明らかにする。

4. 「ぼやき漫才」が笑えなくなるとき——現在の社会的文脈から

当時の漫才で示された事柄が、現在の社会的文脈においても同じように笑えるとは限らない。現在の感覚からすれば、上記の「ぼやき漫才」における発言¹が男性中心主義を背景とした「女性蔑視」を含むことは明らかであるし、それに対しては「差別的で許容できない」「不快である」などの否定的反応が示されうる²。つまりこれは、「笑いの許容範囲」の変動が社会規範の変化にともなって生じることを意味している。しかし注目しなければならないのは、上記の漫才に対する反応がかならずしも一枚岩とはいえず、ストレートな物言いが通用した風潮に対して「当時は良い時代だった」とする懐古主義的な視点や、(偏見の語りの問題性には触れずに)メディア・コンプライアンスの基準から「いまのテレビなら許されない」とする意見が散見される点である。本研究ではこれらの意見の存在を看過せず、「多様性に寛容な現代社会」の表層と内実の複雑な絡み合いを探る。

5. コミュニケーションの縮図としての漫才

漫才を分析するためには、漫才台本や漫才で演じられる内容の内側に目を向けるだけでは事足りない。たとえば、フェミニズムやジェンダーの視点を介した近年のお笑い分析において、お笑い界で維持されてきた構造的な問題(男性中心のホモソーシャルな語り)を指摘する声は重要である(澁谷、2019・西森、2021)。漫才における発言が、そのような構造に依拠して生み出されるものだとしたら、また違和感を抱きつつも笑いというフレームに甘んじてそれを受け入れるのだとしたら、それは当該社会が漫才に限らず同型のコミュニケーションを許容していることのあらわれでもある。漫才が社会規範の産物である以上、コミュニケーションという観点からみても、そこには私たちの振る舞いや態度が縮図的に示されている(あるいはときに、漫才が私たちの振る舞いや態度を方向づけうる)といえるだろう。

注釈

- 1 上記の漫才では、「日本社会」の「あるべき女性像」をめぐるフレームが提示されたうえで、そこから外れる一切の事柄(派手な化粧や先進的なファッション、外来的な子育て、ウーマンリブ運動など)が「ぼやき」の対象となっている。
- 2 視聴者の反応については、当該映像をめぐるソーシャル・メディアのコメントのほか、当該漫才を題材とした授業での受講学生らの見解も参照する。

引用文献

- 澁谷知美(2019)「お笑いとジェンダーについての覚え書き」『早稲田文学増刊号「笑い」はどこから来るのか?』通巻第1031号、pp.120-136。
- 西森路代(2021)「わきまえない女たち——女性芸人とフェミニズムとエンパワーメント」『「テレビは見ない」というけれど』青弓社編集部編著、青弓社、pp.73-85。
- 塙幸枝(2019)「お笑いの視聴における「(多様な)読み」は可能なのか——ホールのエンコーディング/デコーディング理論から」『メディアコミュニケーション学講義』松本健太郎・塙幸枝著、ナカニシヤ出版、pp.13-28。
- ベルクソン、H.(1976)『笑い』林達夫訳、岩波書店。
- 米山リサ(2002)「娯楽・ユーモア・近代——「モダン漫才」の笑いと暴力」『岩波講座 近代日本の文化史 6 拡大するモダニティ』小森陽一ほか編、岩波書店、pp.147-181。

菅政権と政治言語力

—言葉はどのように政治を動かしたのか?—

東 照二 (ユタ大学)

日本の政治で驚くべきことは、菅義偉総理が、2021年9月3日に突然、自民党の総裁選挙に立候補しないことを表明したという事実だ。すぐ直前までは、総裁選挙に出馬することを明言していた総理である。これは、事実上の総理辞任であり、1年間続行した菅総理の政権の終わりである。自民党では、総裁選挙が行われ、2021年9月30日に新しい総理として岸田文雄前政務調査会長(2012-2017年の間、外務大臣)が選出された。党内の各派閥もほとんどが自主投票ということで、混沌とした選挙であった。結果、岸田内閣の誕生は、今までにはなかった新しい自民党、そして日本を変えることを期待した選ばれた、心機一転の政治家が生まれた、ということにもなる。かつては、「不言実行」という言葉があったが、今は、「不言」ではなく、「説明責任」が強く問われる時代だ。今後、様々な駆け引きが党内で行われるだろうが、「聞く力」を取り柄とする岸田総理が、どこまで日本の未来を引っ張っていけるのか、大いに期待したいところである。

振り返って、この1年間(2020年9月から2021年9月まで)の菅総理の政権を取り上げてみると、2020年9月に新総理・首相に就任して以来、当初の支持率の高さもあり、かなり期待された国家的リーダーだと言えた。しかし、主に世界的規模にまで広まった、感染爆発(パンデミック)とまで言われる「新型コロナウイルス」への国家的な対策、その他などで大きな痛手を受けてしまった。支持率も3割程度にまで落ち込み、様々な政策、人事などについて、強力な支持を国民、所属党(自民党)から得られることなく、最後は、総裁選挙を辞退することになってしまった。また、偶然だが、オリンピックが開催された年には首相は辞任して来たというジンクスがあり、実際過去3回のオリンピックでは、池田勇人、佐藤栄作、橋本龍太郎が辞任している。そして2022年、4回目のオリンピックでは菅総理が辞任したということになる。

政治学者の御厨貴氏によると、国民に「説明しない政治」は、すでに第二次安倍政権から始まっていたという。どんな問題やスキャンダルがあっても、国政選挙で毎回勝てば、国会でもメディアでも「説明はしなくてよい」のだとなってきたと、御厨貴氏は指摘している。特に、自民党内でも若手、中堅議員から、菅総理以外の政治家を総理に推したいという意見の強まりも広まっていた。

さて、それではこういった事態に至るまでの、菅総理辞任に至る大きな要因はどこにあったのだろうか。ここでは、政策、外交などを含めて、特に政治家が日頃から使う言語に注目し、その「言語仕様の実態」という点にフォーカスしながら、考えていくことにしよう。「政治」と「言語」は、実のところ、私たちが普通考える以上に、かなり密接にお互いに関連しているという見解も幅広く、様々な学問分野で語られるようになってきている(例えば、東2006、竹中2006など)。菅総理は、一体、どのようにして言葉を使って政治を動かして来たのだろうか。菅総理の「政治」と「言語」を中心にすえて、新型コロナウイルスと政治言語力を考えてみよう。

新型コロナ感染患者が急増している中、2021年8月3日に、差し迫る「医療危機」に対応するため、政府は感染者について、「入院対象を重症化の恐れが高い人などに限る」という方針を示した。これに対し怒りを覚えたインターパーク呼吸器内科クリニックの倉持仁医師は、菅総理は

「至急、おやめになった方がいい」と発言し、これがマスコミなどにも取り上げられたという。倉持医師は、朝日新聞（2021）のインタビュー記事で、次のように述べている。「ある患者さんに入院が必要かどうかは、診察した医師にしか分からない。政治が一律に線をひくことはそもそもできません。官邸主導が強まり、現場のニーズを分かっていない人たちが政策をつくっているのではないのでしょうか。現場の話に**耳を貸さないし、見てもいない**。だから、現実には合わない政策が出てくるのだと感じます。」（太字、筆者による強調）。

この現場医師の指摘を待つまでもなく、実際のところ、菅総理の政治姿勢は、どうなっていたのだろう。はっきり見えてくることの一つは、菅総理の政治への、極めて個人的な（しかし、また日本的でもある）信念と関連しているとは言えないだろうか。端的にいうと、政治家が現場の実態を軽くみるか、場合によっては無視し、逆に世間、広く国民全体ではなく、政治家個人としての自分の意見、政策、人事、目標を強く全面に押し出して、自分の政策を自信を持って進めるべきであり、そうすれば、そのうち国民も理解してついてくるであろう、という楽観的視点があまりにも強く反映されていたのが、菅総理ではないだろうか。日本には、古来から3匹の猿が両手でそれぞれ目、耳、口を隠している意匠があり、「見ざる、聞かざる、言わざる」を示す叡智とされている。菅総理は、実はこの叡智を逆手に取り、国民の言うことは見ない、聞かない、自分の本心も言わない、といったように、多くの国民にとって具体性に欠ける政治を行って来たとも言えないだろうか。

パラメンタリーディベート経験とコミュニケーション指標の関係

上土井 宏太 (九州大学大学院)

1. 研究の背景

近年、ディベート活動に対する関心が高まっており、教育課程においても平成30年に告示された高等学校学習指導要領外国語編・英語編においてディベート活動が明記され(朝美, 2018)、令和4年度から年次進行で実施される。改訂された学習指導要領では、従来の要領でも強調してきた主体性や協働性を「主体的・対話的で深い学び」という表現で更に重視している(長谷川, 2021)。ディベートはその過程において、情報の収集、他者との議論、論点の組み立て、パブリックスピーチ、ジャッジからのフィードバックを反映させての論点のブラッシュアップなど、多種多様な活動を含み、まさに「主体的・対話的で深い学び」を実現する可能性があり、実際に様々な教育効果が報告されている。例えば、el Majidi, de Graaff, and Janssen (2020)は授業でディベートを行った群と対照群とを比較し、統計的に有意にライティングの能力が向上することを示しており、Fauzan (2016)はスピーキング能力が向上したことを報告している。これらの報告を含め、大多数の報告はディベートの試合を行う前にスピーチの原稿などを用意する伝統的な準備型ディベートを用いて行われてきた。一方で近年では、15分~30分の短い準備時間でディベートの試合を行う即興型のパラメンタリーディベート(PD)が注目を集めている(Eckstein, 2015)。

PDを用いた研究や実践報告については、Inoue and Nakano (2006)は質問紙を用いてPDを経験した学生がクリティカルシンキングやスピーチのスキルが向上したと感じていることを明らかにしている他、中川・山内・新谷(2019)が、PDの教育手法としての可能性を考察している研究などがあるが、準備型ディベートと比較すると数は少ない。

そこで本研究では、PDを経験した学生と経験していない学生を対象として、コミュニケーション指標の違いを分析し、先行研究との比較を通して、PDの特徴、日本人学生がPDを行うことで見られる特徴について分析を行った。

2. 研究手法

PDを経験したことのある学生(n=49)、経験したことのない学生(n=79)の2群を対象として、コミュニケーション指標の測定を行った。今回の研究で用いた指標は、他の研究でも多く採用されている、Communication Competence (CC)、Communication Apprehension (CA)、Argumentativeness (ARG)、Willingness to Communicate (WTC)の4つである。各指標は12~24個の質問で構成されており、質問紙は英語で作成した。

3. 結果と考察

各指標について、PD経験者と非経験者の平均値、標準偏差等の差異を表1に示す。ARGは、Argumentation Approach (ARG-ap)から Argumentation Avoidance (ARG-av)を引いた値として求めることができるが、この2つの指標は別々に計算すべき、という先行研究(Croucher, 2021)に基づき、独立した値として計算し、分析を行った。その結果、CC以外の指標について、PD経験者と非経験者の間に統計的に有意な差異が確認された。これに加えて、CAのサブスコア(グループ内、ミーティング、公的な場、対人関係)においてもPD経験者と非経験者で一部の値について

有意な差が確認された。男女間の分析については、CA、ARG-ap で有意な差が確認されており、日本における議論文化、特に競技ディベート、教室ディベートの歴史と現状を背景とした分析を進めている。

これらの指標について長期的な変化に関する実証研究も行う予定であり、発表当日は、約4カ月のディベート経験の前後での指標の変化についても報告する予定である。

表1. ディベート経験者と非経験者の CC、CA、ARG、WTC の平均値、標準偏差

	Debaters (n = 49)		Non-Debaters (n = 75)		Mean Difference	p	F	η^2
	M	SD	M	SD				
CC	59.77	17.39	58.63	17.41	1.14	0.709	0.14	0.001
CA	69.31	8.72	76.75	9.36	-7.44	<0.001	19.73	0.139
ARG-ap	34.65	6.80	31.09	5.14	3.56	0.001	10.96	0.082
ARG-av	25.51	5.63	29.49	4.88	-3.98	<0.001	17.44	0.125
WTC	61.73	12.89	54.24	16.56	7.49	0.008	7.04	0.054

(注) 値域は CC: 0-100、CA: 24-120、ARG-ap : 0-50、ARG- av: 0-50、WTC: 0-100

引用文献

- Croucher, S.M., Kelly, S., Burkey, M., Spencer, A., Gomez, O., Del Villar, C. and Eskiçorapçı, N. (2021). A multi-national validity analysis of the argumentativeness measure. *International Journal of Conflict Management*, 32(1), 88-101. <https://doi.org/10.1108/IJCMA-02-2020-0027>
- Eckstein, J., & Bartanen, M. (2015). British Parliamentary Debate and the Twenty-First-Century Student. *Communication Studies*, 66(4), 458–473. <https://doi.org/10.1080/10510974.2015.1056916>
- el Majidi, A., de Graaff, R., and Janssen, D. (2020). Debate as L2 Pedagogy: The Effects of Debating on Writing Development in Secondary Education. *Modern Language Journal*, 104(4), 804–821. <https://doi.org/10.1111/modl.12673>
- Fauzan, U. (2016). Enhancing Speaking Ability of EFL Students through Debate and Peer Assessment. *EFL Journal*, 1(1), 49–57. <https://doi.org/10.21462/eflj.v1i1.8>
- Inoue, N., & Nakano, M. (2006). The costs and benefits of participating in competitive debate activities. In Eemeren, F. H., Hazen, M. D., Houtlosser, P., Williams, D. C. (Eds.), *Contemporary Perspectives on Argumentation: Views from the Venice Argumentation Conference* (pp. 167–184). Sic Sat.
- 朝美淑子 (2018) 「英語ディベート教育の実情—学習指導要領・教科書の分類を含めて」『大分工業高等専門学校紀要』 55, pp.7-10.
- 中川智皓・山内克哉・新谷篤彦 (2019) 「パラメンタリーディベート (即興型英語ディベート) における議論の整理と評価の一考察」『システム制御情報学会論文誌』 32(12), pp. 446-454.
- 長谷川誠 (2021) 「初等・中等教育の特別活動指導を通じた能力形成：「主体的・対話的で深い学び」の視点から」『佛教大学教育学部学会紀要』 21, pp.129-139.

レトリックとアジ・プロの間に —近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察—

青沼 智 (国際基督教大学)

その高い汎用性故、レトリックは様々な主体により重宝され、歴史の転換期においてその役割を果たしてきた。中でも「持たざる者」にとって、この術が非常に心強い味方となっただろうことは想像に難くない。「弁論は階級闘争哲学の具体的実践とみなすことができる」(May, 2012, p.429)。これは決して誇張ではなかろう。レーニンが弁論を「生きたことば」と捉え、大衆の階級意識を目覚めさせ革命に導く「宣伝煽動 (アジ・プロ ; agitation and propaganda)」の一端を担う重要な活動としたこと (1953, pp.105-6) は、マルクス・レーニン主義に疎いレトリック研究者の間でも周知だ。ホーチミン (Decaro, 2003)、エマ・ゴールドマン (Solomon, 1988)、エドワード・ダービッド (Wilkie, 1968)、アンジェリカ・バラバーノフ (Wilkie, 1974) 等、東西の社会主義・共産主義指導者・政治家・活動家のレトリック (雄弁・演説・弁論) がこれまで、既に数多く研究されている。

日本におけるレトリックと社会主義・共産主義・階級闘争との関係は如何なるものだろうか。明治初期、西洋より日本に輸入されたレトリックが、自由民権運動の「辯舌を以て政府を罵倒せ」ん (外骨, 1929, p.246) とする弁論により、「弁論ブーム」を巻き起こし、そのスピリットは大正デモクラシーに引き継がれた。一方、やはり明治初期、日本に持ち込まれたマルクス・エンゲルスの思想は、知識層に多大なる影響を与え、明治後期から大正期にかけての (非合法) 社会主義・共産主義政党や (合法) 無産政党の設立、さらに「プロレタリア文学運動」を経て、20世紀初頭の日本の言論界で大きな盛り上がりを見せたこともよく知られている。

ただし残念なことに、近代日本の言論界を席卷したこれら二つの接点に関する私たちの学識・知見は限られている。堺利彦、木下尚江、生田長江ら社会主義者・社会主義作家の雄弁や、マルクス主義 (にシンパシーを持つ) 哲学者として名を馳せ、また「解釈学と修辞学」(1938 (昭和13) 年) と題する論考も著した三木清が弁論専門誌『雄辯』の読者であった等、断片的なエピソードの羅列の域を出ない。またそれ以前に、大正・昭和初期の日本のレトリックに関する既存の研究は文芸作品や国語教育の「美辞学・修辞学」に関するものが大勢を占め、雄弁・演説・弁論に関する研究は、明治初期と比較すると極端に少ない。

波多野完治 (1968) は、近代日本のレトリックの「不幸」として「大正デモクラシーとならんで日本国民の政治意識の高揚した昭和初年、すなわちマルクス主義の「宣伝煽動論」に、演説の地位が確立されていなかったこと」(p.97) をあげる。この評価は妥当だろうか。先に挙げた、海外に見られるレトリックと社会主義・共産主義の共闘は、こと日本においては無かったのだろうか。上で触れたような「階級闘争哲学の具体的実践」としての雄弁・演説・弁論が、近代日本政治の激動期存在した痕跡はないのだろうか。

これらの問いに対し答えを導くべく、本研究は昭和初期に日本で発行されたレトリックの指南書、具体的には平凡社発行『プロレタリア雄弁学』(1930 (昭和5)) の分析を試みる。古代ギリシャ・ローマ時代から培われたレトリックを無産階級 (プロレタリアート) に指南する、日本のレトリックと社会主義・共産主義・階級闘争との確固たる接点の存在を示す証拠たる本書を著したのは、近藤栄蔵 (1883-1965) である。日本共産党 (第一次) 創立時の幹部であった近藤につ

いては、暁民共産党事件や国家社会主義転向等そのスキャンダラスな言動ばかりが注目されがちであった（立花, 1978）。その一方で、ボルシェビキ主義を日本に初めて持ち込んだ理論家（同志社大学人文研究所, 1970, p.493）であることや、留学先の米国でいわゆるリベラルアーツ「三学」（Trivium）的な教育に触れ、黎明期の学校対抗ディベートに参加した史上初の日本人の一人であること（School happenings, 1906）についてはこれまであまり論じられていない。

本研究は、近藤のレトリカルな試みの全体像を把握するための第一歩として、『プロレタリア雄弁学』の第1章（「序章」）および付録（「集会の催し方並びに通則」）に焦点を当て、マルクス・レーニン主義の政治言説戦略たる「宣伝扇動＝アジ・プロ（agitation and propaganda）」と近藤が提唱するプロレタリア雄弁との関係を歴史的・理論的に論じる。具体的には、まずレーニンのアジ・プロ論における「生きたことば」概念を確認し、政治闘争の手段としての雄弁・演説・弁論とそれ以外の言論活動（新聞、雑誌等の活字メディア）との共闘戦略を、『プロレタリア雄弁学』において近藤がどう描いているかについて考察する。

なお本稿は「近代日本のレトリックと階級闘争 — 「プロレタリア雄弁学」の理論と源流」（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究）の助成による。

引用文献

ウラジミール・レーニン『なにをなすべきか』大月書店、1953年。

外骨『明治演説史』成光館書店、1929年。

立花隆『日本共産党の研究（1）』文芸春秋社、1978年。

同志社大学人文研究所（編）『近藤栄蔵自伝』ひえい書房、1970年。

波多野完治「日本のレトリック」『思想』532号、1968年。

Peter A. Decaro. (2003). Rhetoric of Revolt: Ho Chi Minh's Discourse for Revolution. Praeger.

Matthew. S. May. (2012). Orator-Machine: Autonomist Marxist and William D. "Big Bill" Haywood's Cooper Union Address. *Philosophy & Rhetoric*, 45.

School Happenings. (April 1906). The [California] Polytechnic Journal, 1

Martha Solomon. (1988). Ideology as Rhetorical Constraint: The Anarchist Agitation of "Red" Emma Goldman. *Quarterly Journal of Speech*, 74.

Richard W. Wilkie. (1968). Eduard David's referent leader: A rhetoric of German socialism. *Quarterly Journal of Speech*, 54.

Richard W. Wilkie. (1974). The Marxian Rhetoric of Angelica Balabanoff. *Quarterly Journal of Speech*, 60.

キケロの『弁論家について』に公正であること

—「発見」の実践と共和主義の幸運—

藤巻 光浩（フェリス女学院大学）

本論では、キケロにとってのレトリックに関する、レトリックという学からの思想史上の解釈の枠組みを提示してみたい。奇妙に思われるかもしれないが、キケロに関しては、レトリック以外の視点からの読みが浸透してきた。例えば、キケロによる手紙の写本を発見したペトラルカ以後は、文芸の伝統の中で読まれてきたし、ストア派による読みを引き付けたものは哲学の観点からのものも多々あった。したがって、キケロによる『弁論家について』のトピック（*τοποι*）である「レトリック」という学術の要求する枠組みは、必ずしもそれ自体にとって公正ではなかった。

多くの場合、この著作は、アリストテレスの『弁論術』を踏まえたものとして認識されてきた。その関係で、アリストテレス的視点を反映させた弁論術、つまりレトリックの叙述・解説が記されている著作として位置付けられてきた。つまり、学知の対象として弁論を定位し、それを細分化して説明を施したり、概念の輪郭を明確にし、その言語実践を通して、その対象を明らかにしようとする著作として、である。

思想史を作る上で、広くどの著作にもそのような期待が寄せられ、対象をそのようなものとして解釈することで、その内容が、思想史を構成する要素として位置づけられる。そのため、「レトリックとは何か」という存在論的問いに対する解答が与えられることが強く期待され、思想史上の位置づけが決定されようとしてきたのである。要するに、その著作の中で触れられた概念を分類し、その対象を個別に存在させようとするカタログ作りをしているがごとくである。

一方、キケロの『弁論家について』に関して、そのような言語実践を期待することはかなり難しい。というのも、それが一貫性を欠く対話篇にみえるというだけでなく、レトリックという領域そのものが、存在論的探求に対する期待に応えることになじまない性質を持つためである。そのため、この性質に関しては、哲学者や古典学者からは、その重要性が網羅されることはほとんどなかった。例えば、バートランド・ラッセルは、自身の哲学史叙述において、キケロを幾度となく登場させておきながら、キケロだけに特化した段落は一つも作ることはなかった。プラトンのラテン語翻訳をしたこと、ユークリッド幾何学のギリシアからローマへの橋渡しをしたこと、ストア派のポセイドニオスを紹介する時に言及するのみである。これは、キケロを哲学の範疇に収めるためには、キケロの書いたものが不充分であると認識されたからであろう。この理由に関しては、ヘーゲルが簡潔に述べている。ヘーゲル曰く、「(キケロの) 哲学は、思索を深めるという点では価値なきもの」とのことだ (2016, 418)。哲学史でなくとも、キケロが大きな役割を果たした共和制ローマの歴史叙述においても、キケロには厳しい評価を与えられている。例えば、モンテスキューが『ローマ盛衰原因論』の中で「(キケロは) 脇役として素ばらしい素質を持っていたが、自ら主演を演じることはできなかった」と、著しい評価を下している (1980, 287)。哲学者たちによる、否定的なキケロへの認識が広く定着していることが伺われる。

さらに、日本のキケロ研究は、古典学者の多くがドイツへと目を向けてきたために、19世紀にキケロをひどく中傷したテオドール・モムセンによるキケロ評が定着してきた。また、一部が岩波文庫で翻訳されてきたとはいえ、ほぼすべての著作を収めた『キケロー選集』全16巻が岩波

書店から出版されたのは、もう 21 世紀になろうかという時期であった。これは、キケロを哲学や古典学からの視点で扱ってきたために、その扱いが低くなってしまったことの証左であろう。

このように低評価であり続けたキケロの評価を、本論では、まず『弁論家について』においてキケロが実践していることが、これまでの読みとは異なる解釈を要求していることを、提示してみたい。その結果、キケロに与えられてきた、良くとも両義的な評価や、最悪の場合は極度の否定的な評価があるのだが、これらに関して、これまでの評価の方法とは異なるかたちで、思想史の中に埋め込んでみたい。その結果、キケロによる雄弁の思想史上の評価を刷新したいのである。

本論では、これまでアリストテレスによる『弁論術』との関係で位置付けられてきたキケロの『弁論家について』を、イソクラテスを始めとする政治弁論家やソフィストによる教育の伝統の中に位置づける。中でも、第 1 巻を取り上げ、「発見 (*inventio*)」の役割の大きさに注目する。通常は、第 2 巻に「発見」に関係する議論が叙述されていることが指摘されているのだが、本論では、「学識ある弁論家 (*doctus oratore*)」をトピックとした第 1 巻にこそ、弁論術について記したキケロの思想が凝縮していることを手掛かりとする。ここにおいては、このトピックに関して議論を深めるクラッススとアントニウスらの対話そのものが、カタログ的な弁論術の存在論には収まりきらない行為遂行的な言説実践となっており、むしろ共和主義と弁論術の間にある不可避な相互関係を提示する場となっている。とかく弁論術というと、言葉の詞藻の工夫にのみ執着する術に考えられているが、この対話篇が発見のための両論 (*δισσοι λόγοι*) によって構成されていること、そして本作品が古典共和主義を担う教育的手引書であったことを提示したい。

引用文献

バートランド・ラッセル『西洋哲学史：古代より現代に至る政治的・社会的諸条件との関連における哲学史』（市井三郎訳）みすず書房、1970

ヘーゲル, G.W.F.『哲学史講義 III』河出書房新社、2016

モンテスキュー、シャルル・ド「ローマ盛衰原因論」（井上浩治訳）『世界の名著 34』中央公論新社、1980

大会実行委員長 **Program Chair**

高井 次郎 (名古屋大学)

Jiro Takai (Nagoya University)

大会実行委員 **Program Committee Members**

今井 達也 (南山大学)

Tatsuya Imai (Nanzan University)

宮崎 新 (名城大学)

Arata Miyazaki (Meijo University)

谷口 紀仁 (名古屋大学)

Norihito Taniguchi (Nagoya University)

毛利 雅子 (名古屋市立大学)

Masako Mouri (Nagoya City University)

実行委員 (JCA) **JCA Committee Members**

①大会プログラム・学術局関連 **Convention Program**

責任者 守崎 誠一 (関西大学)

Seiichi Morisaki (Kansai University)

小西 卓三 (昭和女子大学)

Takuzo Konishi (Showa Women's University)

日高 勝之 (立命館大学)

Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)

菅野 遼 (昭和女子大学)

Ryo Kanno (Showa Women's University)

②大会プログラム・発表査読者 **Review Committee**

小西 卓三 (昭和女子大学)

Takuzo Konishi (Showa Women's University)

日高 勝之 (立命館大学)

Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)

③受付・事務局関連 **Registration**

責任者 松島 綾 (立命館大学)

Aya Matsushima (Ritsumeikan University)

宮脇 かおり (桃山学院大学)

Kaori Miyawaki (St. Andrew's University)

脇 忠幸 (福山大学)

Tadayuki Waki (Fukuyama University)

④大会広報関連 Advertisement

責任者 松本 健太郎 (二松學舎大学)

Kentaro Matsumoto (Nishogakusha University)

今井 達也 (南山大学)

Tatsuya Imai (Nanzan University)

宮崎 新 (名城大学)

Arata Miyazaki (Meijo University)

友池 梨紗 (愛知淑徳大学)

Risa Tomoike (Aichi Shukutoku University)

コミュニケーション学会 会長及び本部（学会事務局） President and Office of JCA

会長 President 高井 次郎（名古屋大学） Jiro Takai (Nagoya University)

学会事務局

JCA Office :

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5

358-5 Yamaguki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo,

アカデミーセンター

The Office of Japan Communication Association

日本コミュニケーション学会事務局

162-0801

Phone: 03-6824-9372 FAX : 03-5227-8631 E-mail: jcom-post@bunken.co.jp

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先 :

For inquiries regarding membership, dues, and publications:

国際文献社

International Academic Publishing Co., Ltd.

アカデミーセンター

Academy Center

日本コミュニケーション学会事務局

The Office of Japan Communication Association

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5

358-5 Yamabuki-cho Shinjuku-ku Tokyo,

162-0801

Phone : 03-6824-9372 FAX : 03-3368-2827

E-mail: jcom-desk@bunken.co.jp